

山
を
こ
え

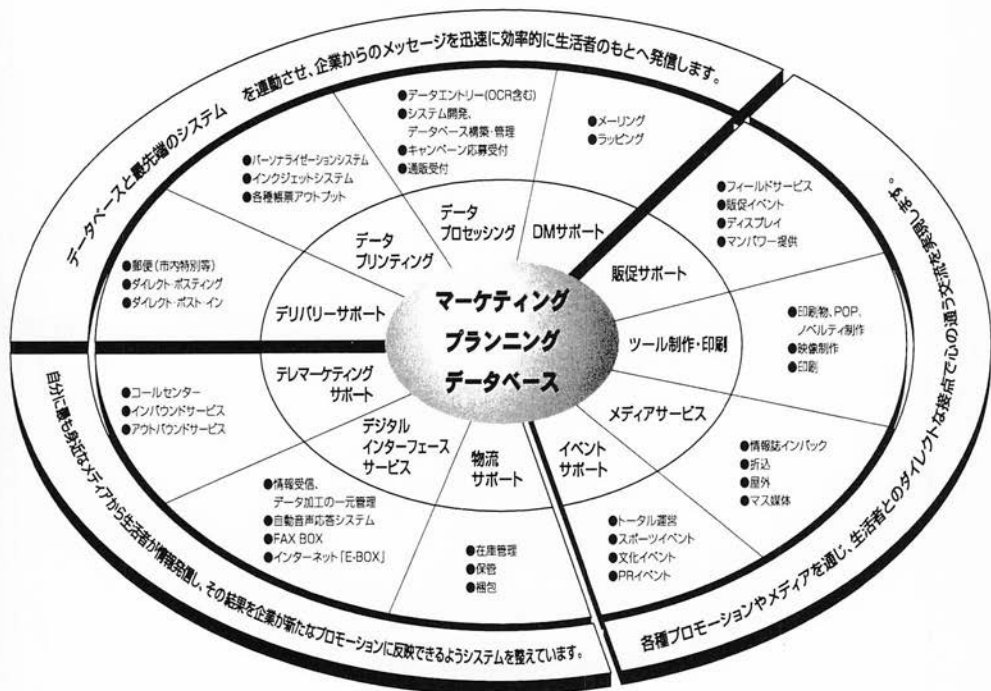
第32号 平成13年11月
関東氷上郷友会



ダイレクト・コミュニケーション・トータルサービス Direct Communication Total Service

当社の提供するダイレクト・コミュニケーションの中核には、常に時代の動向を見据えて開発を進めて来たマーケティング、プランニング、データベースのノウハウがあり、企業と生活者の日々変化し多様化するニーズにも即座に対応できるフレキシブルなシステムを構築しています。

当社は、幅広い領域に及ぶダイレクト・コミュニケーションのサービス全般を自社内で一貫して運営することによって、業務の効率化、高品質化、迅速化に貢献すると共に、トータルサービス・エージェンシーならではの新しい付加価値を創造し、企業にご提案しています。



効率化

高品質化

迅速化

新しい付加価値の創造とご提案



株式会社 ディーエムエス

本社 〒101-0052 東京都千代田区神田小川町1-11 大阪支社 〒535-0031 大阪市旭区高殿7-15-8

●お問い合わせ：営業企画部 TEL.03-3293-2970 (代)

山
ざ
ら

第
32
号

山ざる 第32号 目次

〈表紙〉常岡幹彦画「川代の秋」(10号・山南町・川代溪谷)
〈扉・目次写真〉佐治川の土手(氷上町朝阪・渡邊隆男撮影)

△こあいさつ▽

あのふるさと……渡邊隆男 5

平成12年度「郷友集いの会」……6

祝寿の方々ご紹介……10／懇親会スナップ……12

佐々木盛雄氏逝く……14／生涯貫く憂国の至情……石田勝彦 14

寄附者御芳名……16／会計報告書……17

△ふるさと随想▽

幸世に落ちた米軍戦闘機の謎……日置孝彦 18

三婆はな「土夢」に集う……木村つた江 20

ふる里の古刹―高源寺……村上久夫 23

旧生郷中学校の恩師……大塚秀式 26

キンちゃんに敬礼ノ……足立正美 27

丹波を撮る……撮影・徳田八郎衛 32・54



△近況・エッセイ▽

- 映画を見て考えたこと……岡田昌子 36
笑顔との出会いの中で……山本明男 38
平凡な毎日の幸せ……本間敦子 41
日々を詠む……伊藤富士子 42
東の間のベネルクス・イギリス……生田清弘 44
父と夫を偲んで……木呂子恵美子 51

△会員だより▽……56

△わが師を語る▽ 松尾源三先生

弱きを助ける熱誠の士……徳田八郎衛 60

永遠の青年だったボンちゃん……足立和巳 64

青空のように突き抜けた明るさ……上野重喜 66

△ふるさとトピックス―丹波新聞から―▽……31・53

△BOOKS▽……69

△インフォメーション▽ 展覧会……72 / 同窓会……75

協賛広告……76 / 編集後記……88



おじやみ唄

おじやみ おふた おみい およう いつおむう カツテコカトンキ おじやみざあく
ら おふたざあくら おみいざあくら およおざあくら おいつざあくら おむうざあ
くら ざあくら ひとよせざあくら ざあくらおなあ なかつけ チョンキンキン お
みつぼこぼし出たよ かわいや子供 高い山から 低い山から 砂にまぶれて コロリ
ンシヨ チョンキ おぬけおぬけおぬけおぬけ おつめおつめおつめ チョンキン お
つたつる おつたつる おふたつる おふたつる かるくつる チョッキン やつ
このむねつけ やつこのむねつけ やつこのむねつけ チョッキン おわかれ おわか
れ おわかれ わかれ おたかの落としてチョッキン
おじやみ 日清戦争 三韓征伐 義経弁慶 五条の橋 六口華 七生奉公 八重桜
カツテコカトンキン

あのふるさと

会長 渡邊 隆 男



郷友の皆さま、お元気ですか。また一年が矢のように過ぎ去りました。「山ざる」32号をお届けします。この小冊子があるに古里を想わせるよすがになれば幸いです。

昨年の十二月初旬、私はミャンマー（ビルマ）のヤンゴン（ラングーン）大学に日本の図書を寄贈するために出張しました。ミャンマーは親日国で、日本語を学ぶ学生が三千人ともいると申します。ミャンマーは『ビルマの竖琴』でもおなじみの敬虔な仏教徒の国で、人はみな子供の頃から一度は仏門（小乗仏教）に帰依し、依鉢裸足行脚の修行を積むのです。蚊も叩かない厳しい戒律を守り、日常の挨拶にも手を合わせ、ていねいなお辞儀を交すのです。今どきこれほど慎ましい民族が、いったい地球上にいるのでしょうか。私はヤンゴンからバガン、そしてかつての激戦地、マンダレーにも足をのびして仏教遺跡を訪ね歩きました。

ごあいさつ

バガンの荒野に林立する数十基の巨大なバゴダが千年の栄枯の歴史を秘めて、真紅の夕日に映える荘厳なあのまぶしいシルエットが、今も眼前に浮かびます。

ところで、ここで聞いていただきたいのは、その後に私が出合った一幕の心象風景についてなのです。

夕陽を見送り、遺跡を背に、薄暮に包まれた枯野を散策しながら帰路につきました。一面の畑は収穫が終わって雑草に包まれ、曲がりくねった農道に荷馬車の轍がくぼんでどこまでも続き、その彼方に二、三軒の農家、萱葺きか、畦道や土手にはススキ尾花が群生して白く棚びきます。赤とんぼが飛び交い、カナカナカナと蝸かきが鳴くではありませんか。

私はしばし茫然と佇み、筒袖・わらぞうりの子供の頃に、知らずタイムスリップしてしまいました。それは六、七十年も前の古里の、まさしくあの風景なのです。

そして、とめどなくあの頃の風情に包まれていったのです。今はもう故郷にもなくなった、あの子供の頃の古里が、遠く離れたビルマの荒野にあったのです。見つけたのです。

うらぶれた、わびしさ、悲しさ、孤独、そして貧しさ、もの恋しさがそこに漂っていたのです。今の故郷にはもうなくなったそれが、そこにあったのです。満ちていたのです。

私たちの「心のふるさと」は、そう思えば、いつどこにもあるのかもしれない。——一人ひとりの記憶とともに。

交わりゆく丹波も話題に

平成12年度「郷友集いの会」



兵庫県副知事・芦田弘逸氏の講演

平成十二年度「郷友集いの会」は十一月二十五日（土）九段会館において催された。総会、祝寿会、懇親会は、久しぶりに七〇名をこえる参会者を得て、にぎやかに繰り展げられた。

総会に先立ち、兵庫県副知事芦田弘逸氏に、交わりゆく丹波の現況を「丹波、きょう、あす」と題してお話いただいた。

芦田弘逸氏は兵庫県政ひとすじに勤めあげられ、平成十三年に退官された。青垣町のご出身である。

総会は、渡辺会長のあいさつに続き、坂上理事の会務報告、谷口会計担当理事より会計報告、荻野監事より監査報告があり、いずれも承認を得た。なお、本年は総会の議決を必要とする議案がなかったため、議事を省略した。

懇親会は、昨年につづいて佐々木盛雄氏に乾杯の音頭をお願いした。ユーモアとエスプリで会場に笑いをさそう話しぶりは、相変らずの健在ぶり。祝寿会では竹内恵美子さんに会長から祝詞と花束を差し上げた。ますますのご健康とご長寿を改めて祈念したい。

宴会は例によって、なにやかやの話題に花が咲き、いつ果てるともしれない。



祝寿の花束を抱え挨拶する
竹内恵美子さん



乾杯の音頭をとる
佐々木盛雄氏

恒例の「お楽しみ福袋」と「抽せん会」には、多くの景品の協賛を得た。会からの贈りものは定番、丹波山の芋と当年度産丹波黒豆各五本。抽せんまで幸運を射止めた人達に、JAひかみと篠山の小田垣商店からそれぞれ直送した。

午後三時お開きとなり、二次会場へ多くの人びとが流れた。

※佐々木盛雄氏は平成十三年八月二十五日他界された。享年九十三歳。心からご冥福をお祈り申し上げます。

(坂上勝朗記)

◎平成十二年度「集いの会」出席者(敬称略・順不同)

〈来賓〉(一名)

芦田 弘逸(兵庫県副知事)

〈祝寿〉(一名)

竹内恵美子

〈会員〉

○青垣町(五名)

足立静雄 足立正美 足立吉数 飯田光雄 安原三智子

○市島町(十四名)

井田悦子 荻野武 片岡クミ子 木下聡 木村つた江
河野征美 河野弥代子 近藤勇 田中篤郎 高見秀史
藤田純 藤田徹 丸川宥次郎 森下千寿子

○柏原町(十一名)

足立和子 生田清弘 岡吉明 小田晋作 小田富士夫
岸本真輔 坂本重雄 志村勝郎 高尾久子 徳田八郎衛
宮野近

○春日町(六名)

足立知佳子 上田脩 木呂子恵美子 佐々木盛雄
村上末吉 吉住自由造

○山南町(十四名)

池田忍 植木十和子 小田明子 梶原やす子 岸本明
久保春雄 久保良雄 笹倉鐵平 田中寛 中居篤子
逸見あや子 増井攻 若森敏郎 渡辺貴美子

○氷上町(二十名)

足立謙悟 足立勝 足立吉雄 安達健一郎 上高子
上野重喜 大地富美子 岸本勲 岸本敏子 岸本圭司
岸本昌子 小山とし子 坂上勝朗 谷口捷 谷口浩章

仲矢美恵 長尾貴美代 藤田玲子 藤原智徳 渡邊隆男

○西脇市(一名)

笹倉郁子

●お楽しみ福袋・抽せん会景品寄贈者(到着順・敬称略)

足立 静雄 せんべい 五箱

大野 善三 「人は誰でも間違える」 三冊

細川 倫夫 鳩サブレ 五個

芦田 重秋 お菓子 一五箱

氷上 高校 自家製「みそ」 一〇袋

丸川宥次郎 高麗ニンジン茶 三箱

鶴田ゆき子 明治ミルクチョコレート 一〇〇枚

荻野 武 北海道六花亭チョコレート 二〇箱

足立 和巳 日高こんぶ 一〇個

上田 脩 ランチョンマット 一〇枚

高見嘉都司 スズケンだしの素 七個

篠原よね子 作品集 二〇冊

坂本 重雄 ミニ赤飯 五個

久保 良雄 d a 清里マドレーヌ・フエナンシエ詰合せ 一〇個

久保 良雄 わさびふりかけ 二個

久保 良雄 わさびのり 二個

久保 良雄 わさびのり 二個

岡林 逸男	ボジョレーヌーボー二〇〇〇	二本	高見 秀史	ボジョレーヌーボー	三本
岡 吉明	織田煮	三個	笹倉鐵平	アートワイン	二本
木呂子惠美子	「さかぐち」の一口おかき	一〇個	千葉 淳子	丹波大納言小豆	一〇袋
小田富士夫	丹波黒豆菓子	一〇個	徳田八郎衛	別冊宝島「自衛隊の実力」	三冊
池田 忍	書きつぐ生活メモリー50	一〇冊	吉住自由造	両口屋是清のお菓子	五個
梶原 清	篠山清明堂の黒豆おかき	一五個	中居 篤子	アルプスのモカロール	一〇箱
常岡 幹彦	低温だし醤油	三五本	藤田徹 藤田純	韓国大麦麵	五〇袋
西川 宣孝	図書券	五枚	中国盆栽		二個
	明治ギフト券	二枚	上野 重喜	司馬遼太郎「日本史探訪」角川文庫	七冊
	おこめ券	二枚	堀井 隆川	五本指靴下	五足
	ビール券	三枚		ホルダーつきペンライトキー	五個
谷口 浩章	小倉こんぶ詰合せ	六個	渡邊 隆男	中国名画額縁	五枚
木村つた江	ミルフィーユ	一〇個	安原三智子	龍ノ茶	一個
	著書「山百合」	三五冊		ウーロン茶	二個
岸本 勲	ドライソックス	四足		インスタントコーヒー	一個
	フェイスタオル	二枚	関東水上郷友会	山の芋(三kg)	五箱
	イビークロック	二個	丹波黒豆(一・八リットル)		五箱
	帽子	一個			
坂上 勝朗	新巻き鮭	五本			
村上 末吉	コンパクトカメラ(ズーム付)	一台			
宮野 近	広重・鐘ヶ坂絵入り風呂敷	五枚			
片岡クミ子	おかき	一〇個			

祝寿の方々に紹介

郷友会では、毎年の総会で八十歳を迎えられる会員に祝寿のお祝いをしておりますが、今年その記念の年に当たられる七名の方々に、以下の項目につきアンケートを依頼しました。そのうち、三名の方々から回答いただきましたのでご紹介します。

(順不同)

〈アンケート項目〉

- ①生年月日
- ②出身地
- ③上京の年月日
- ④上京の動機
- ⑤これまでに最も印象に残ることは
- ⑥祝寿を迎えられてひと言

〈生まれた年・大正10年・1921年〉第一次世界大戦の反動不況が深刻化した年。足尾銅山の大争議をはじめ小作争議や労働争議が頻々として起き、安田財閥の総帥や原敬首相が暗殺されるという暗い世相でもあった。一方、大正デモクラシーの自由な風潮も高まり恋愛や思想面にも現われた。

〈二十歳の年・昭和16年〉言わずと知れた大東亜戦争はつ発の年。真珠湾攻撃のニュースを歡喜して聞いたが、4年後の悲惨な敗戦を知る由もなかった。すでに兵隊検査を終え、若き力を蓄えていただけに最前線での戦闘に多くの尊い命を捧げた世代でもあった。

〈還暦60歳の年・昭和56年〉2度のオイルショックに見舞われながら米国を抜いて世界一の自動車王国にのし上がり、日本経済は好調ゆえに会社は定年を迎えていても働き場所に困ることはなかった。

田 敏夫様

- ①大正10年8月30日
- ②東京・四谷本村町
- ③④東京出身のため省略
- ⑤太平洋戦争で学徒動員となり東京築地の海軍経理学校卒業後、

主計将校として舞鶴海軍鎮守府運輸部勤務となった。終戦を迎え、復員輸送のため大陸からの復員軍人、民間人の帰省を大阪鉄道局(当時の局長は佐藤栄作元首相、父・田誠の鉄道の後輩)と協力して一生懸命行なった。

幸い柏原に姉一家が疎開していたので、週末には柏原下小倉の田挺吉さん(祖父、田健治郎の兄)の離れ屋敷にいる姉一家を訪ねた。この時の柏原下小倉の田園風景が五十数年後今日でもすっかりと心に残っている。

祝寿の方々ご紹介



⑥ 80歳といわれても余りピンとこないのが今の気持ちです。「健康」であることを第一に考え、良く眠り、規則正しい生活を送っています。毎日夕方二〇分間の散歩をここ十年間欠かさず実行。自動車の運転と同じでセイフティドライブが人生ではないでしょうか。

岸本 眞輔様

- ① 大正10年5月9日
- ② 氷上郡柏原町
- ③ 昭和44年12月
- ④ 転職のため
- ⑤ 終戦で無事復員できたこと。

⑥ 生かされてきたことに感謝し、毎日を大切に過ごしたいと思えます。

依藤 廣次様

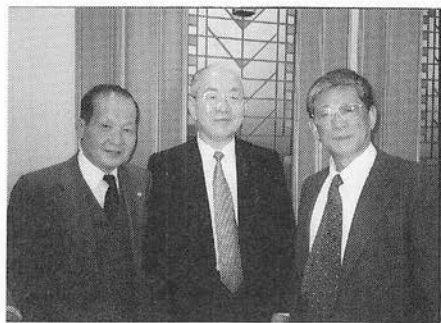
- ① 大正10年3月4日
- ② 氷上郡山南町(旧小川村)野坂
- ③ 昭和42年10月15日
- ④ 家庭の事情で転職を希望し、大阪支社より東京本社へ転勤した。
- ⑤ 最近まで波乱万丈の月日でした。回想すれば一冊の本が書けるくらいです。簡単に一つ二つを小文に取り上げることができませんので割愛します。

⑥ いつの間にかこの齢になったというのが実感です。大正十年前後生まれは、戦争の影響を一番多く受けた世代で、五人に一人が犠牲になっています。と言われております。しかし私は無事通過です。それにもとも

と身体が弱かったのです。今も病名は五つを数えますが、毎日なんとか動き廻っております。これはきつと神か仏か或いは背後霊の加護によるものと思いません。漠然と感謝しながら今日一日を大切に生きている次第です。最近世の中は次々事件が発生し騒然としておりますが、氷上郷友会会員のご家庭はいつも平安でありますよう、本欄を借りて皆様のご多幸をお祈りします。



懇親会スナップ





佐々木盛雄氏逝く

生涯貫く憂国の至情

石田 勝彦（春日町）



元衆議院議員の佐々木盛雄氏が去る八月二十五日午前八時二十三分、急性心衰弱のため、東京都新宿区中井の自宅で死去された。九十三歳。告別式は同月二十七日、自宅で行われた。喪主は妻、たね子さん。

佐々木氏は、明治四十一年、春日町下三井庄生まれ。旧制柏原中（現柏原高校）、東京外語学校（現東京外国語大学）

を卒業後、報知新聞記者を経て、一九四七年（昭和二十二年）に当時の自由党から旧兵庫五区（丹波・但馬）で衆議院選に初当選、通算四期つとめた。池田内閣の官房副長官として活躍したほか厚生常任委員長、労働政務次官などを歴任した。

新憲法下で初めての総選挙では、アメリカからの日本独立を強く訴えて当選を果たし、吉田茂首相に同行して、サンフランシスコ講和会議に列席するなど、得意の語学力を生かし、外交問題などで論陣を張った。

六〇年（昭和三十五年）に政界引退後は、政治評論家として執筆活動などを続けていた。

叔父（父の弟）佐々木盛雄から一ヶ月ほど前「K氏は君の小、中学の同窓でなかったか」と、丹波新聞の切抜記事（丹波の人NOW）を送ってきてくれ、老齢（九三歳）ながらも、まだまだ記憶も確かなものと安心していたところに訃報が入った。今になって悔やんでもはじまらないが、明治、大正、昭和、平成の四代に及ぶ激動の時代に生き抜いてきた叔父の話は今一度聞いておきたかった。

私が早稲田大学に入り、自衛隊に入隊したのも、叔父の新聞記者としての活躍や国の前途を憂慮した政治談義をよく聞かされたことに触発されたのかも知れない。

叔父は明治四十一年、父石田岩蔵、母静の四男として春日町下三井庄で生まれ、柏原中学を卒業後、東京外国語大学に入學し、満州事変が起るや、東都学生連盟代表として朝鮮羅南依田旅団長の専属通訳として従軍、大学卒業後は報知新聞社に入社し海外特派員として世界各地に駐在、この間に母の実兄佐々木富造の養子となった。

戦後は早期講和条約の締結による日本独立回復をスローガ

ンに昭和二十三年新憲法最初の総選挙に出馬し、当選後は国会外務委員代表として、吉田首相を首席全権とするサンフランシスコ講和会議に参列した。また叔父は反共理論の闘士としても活躍し、当時出版した「反共読本」には、吉田茂首相の推薦の言葉として「佐々木盛雄君は熱血の少壮政客であると同時に、冷静なる学究の徒である。そして彼は、真理の前には何ものをも怖れぬ信念の持主である」と述べられている。

私の大学卒業時（昭和三十四年）は大変な就職難で頭を痛めていたところ、叔父の勧めもあり、自衛隊（一般大学卒を対象とした幹部候補生学校）に志願を決意した。その折のエピソードとして、叔父の配慮で叔母が準備してくれた菓子折りを持ち、当時の防衛政務次官の辻議員に挨拶に出かけることになり、議員宿舎廊下の名札を頼りに事務所を訪ねたところ、正面に眼光厳しく、背筋を伸ばした威厳のある紳士が椅子に座り、そして静かに「石田君、防衛政務次官は私でなく、辻寛一さんなんだよ」との言葉が返ってきた。私の対面したのは旧陸軍参謀として名高い辻政信議員であった。

昭和四十六年、私が北海道に在任中、叔父から「ああ憂国の三島魂」の小冊子が送られてきた。これは昭和四十五年十一月二十五日、自衛隊市ヶ谷駐屯地において、自衛隊の決起を訴えて割腹自決した「楯の会」三島由紀夫隊長、森田必勝、青年らの憂国の精神を、ことさらに、悪どまに罵倒し、侮辱、

嘲笑し去る風潮に公憤と焦燥に駆られた叔父が師走の夜を徹して一気に書き上げたものであったが、叔父の憂国の至情と、私に自衛隊を勧めてくれた本意が切々と伝わり、涙したものである。

この小冊子は自衛隊退官後も座右の書としている。

今日もなお、いやますますの世相狂乱を眺める時、亡き叔父の霊を慰める如何なる言葉もむなしく、ただただ安らかに眠られんことを祈るのみである。

合掌

（追記）私の自衛隊在任間の後半は、本庁幕僚監部の情報幕僚や情報専門部隊の隊長等を歴任し、一貫して情報業務に従事し定年を迎えた。

これも入隊直後、叔父の柏原中学一年先輩の藤原岩市氏が陸上自衛隊調査学校長であったことに縁があり、同校に入校、当時は旧軍中野学校出身の教官が多く、宜しき薫陶を得たものである。

昨年春、郷里に滞在中、丹波新聞の臼井編集長の御尽力で、故藤原岩市氏の妹御様を訪ねることができ、藤原氏が旧軍時代にF特務機関長としてビルマ作戦等に活躍されたエピソードの一部や私が幼少の頃、福知山の映画館で血の沸き上がる思いで見た「マレーの虎」の主人公のモデルが藤原氏であることなどを伺うことができた。

●寄附者御芳名

高見	杉村	杉上	近藤	岡	生田	葦田	三野	千種	谷口	谷口	近藤	荻野	久保	足立	平元	駒宮	金出	植田	足立	兵庫
秀史殿	洋子殿	能章殿	哲夫殿	吉明殿	清弘殿	冬子殿	溪子殿	倫幸殿	浩章殿	捷殿	勇殿	武殿	良雄殿	良平殿	富美子殿	和子殿	一朗殿	憲雄殿	正喜殿	東京事務所殿
三〇〇〇円	三〇〇〇円	三〇〇〇円	三〇〇〇円	三〇〇〇円	三〇〇〇円	三〇〇〇円	五〇〇〇円	五〇〇〇円	五〇〇〇円	五〇〇〇円	五〇〇〇円	五〇〇〇円	六〇〇〇円	六〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円

原稿大募集

本誌は会員皆様の寄稿によって作られております。どんな内容でも結構です。ふるってご寄稿ください。

●

テーマ：①ふるさと随想
 ②近況エッセイ
 ③会員だより（短信）
 ④催し（個展・同窓会など）
 ⑤丹波を撮る（写真）

締切日：原稿はいつでも受け付けております。次号の最終締切りは平成14年8月20日です。

原稿枚数：400字詰4～5枚程度

送付先：〒104-0032 東京都中央区八丁堀1-8-2 ISビル2F
 (株)ホンゴ出版内
 『山ざる』編集部
 TEL 03-3537-6221
 FAX 03-3537-6222

■ワープロで打たれた方は複写のフロッピーをお送りください。

藤原	田中	坂上	木呂子	大地	池田	山本	山口	堀井	藤田
智徳殿	篤郎殿	勝朗殿	恵美子殿	富美子殿	忍殿	喜則殿	和久殿	隆川殿	千治殿
二〇〇〇円	二〇〇〇円	二〇〇〇円	二〇〇〇円	二〇〇〇円	二〇〇〇円	三〇〇〇円	三〇〇〇円	三〇〇〇円	三〇〇〇円

千葉	笹倉	大石	小糸	和田	原	中村	谷垣	大野	和田
淳子殿	郁子殿	佐代子殿	イキ殿	信雄殿	利充殿	武子殿	邦夫殿	茂昭殿	栄子殿
五〇〇〇円	五〇〇〇円	五〇〇〇円	五〇〇〇円	一〇〇〇円	一〇〇〇円	一〇〇〇円	一〇〇〇円	一〇〇〇円	一〇〇〇円

会 計 報 告 書

(平成12年7月1日～平成13年6月30日)

関東水上郷友会

会計理事・谷口 浩章

鶴田ゆき子

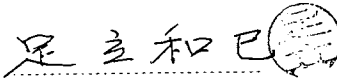

(単位：円)

収 入 の 部			支 出 の 部		
科 目	金 額	摘 要	科 目	金 額	摘 要
繰 越 金	1,637,648	郵便貯金 833,868円 定額貯金 800,000円 振替貯金 2,930円 現 金 850円	出 版 費	1,216,965	『山ざる』31号
			通 信 ・ 印 刷 費	178,236	総会・役員会案内等
年会費収入	470,000	延 195名	総 会 費	484,752	総会関係支払
総会費収入	429,000	71名	会 議 費	280,700	役員会等
役員会費収入	142,000	延 32名	支 払 手 数 料	16,680	振替手数料 12,820円 送金手数料 3,860円
編集会費収入	33,000	11名			
寄 付 金	156,896	延 42名	消 耗 ・ 備 品 費	61,110	
広告料収入	797,500	延 70名	繰 越 金	1,428,113	郵便貯金 628,113円 定額貯金 800,000円 振替貯金 0円
受 取 利 息	512	郵便貯金 512円			
合 計	3,666,556		合 計	3,666,556	

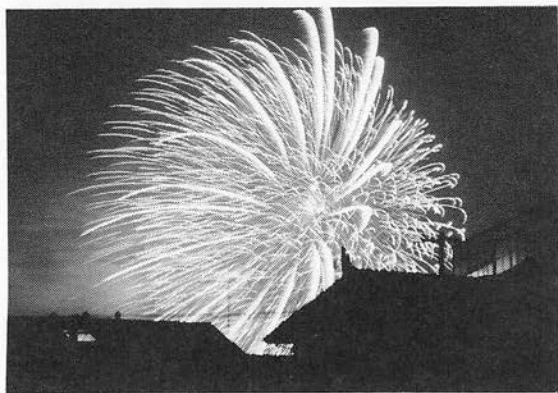
監査の結果、上記の通り相違ありません。

平成13年7月25日

会計監査

ふるさと随想



幸世に落ちた米軍戦闘機の謎

日置孝彦（氷上町）



昨年、私は友人が送ってくれた会報『幸風』第九号（平成十二年一月 幸風会発行）に掲載された記事を読んで不可解な出来事があるものと不思議でなりませんでした。その記事のタイトルは、シリーズ幸世歴史探訪VOL8『幸世に米軍戦闘機が落ちた日！』（パートⅡ）と記されていました。

書き出しは「前回、戦闘機のことを書きましたところ、多くの方からさらに詳しいお話を聴くことが出来ましたので、今一度書きたいと思います。」文末には「前回昭和二十年十二月末から一月中旬と書きましたが、昭和二十三年十二月末から昭和二十四年一月中旬の出来事と訂正します。」（案内人 谷本敏晴・井中）と結んであった。

戦後、数年がたったある日、突然に米軍戦闘機が氷上町北地区（旧幸世村）に不時着した事故がありました。何故、会報『幸風』に二度も不時着に関する記事を掲載しながら不時

着の日がわからないものかと一瞬とまどいました。月日は知らぬ間にどんどん過ぎて行きます。長い歳月の間にはその当時を知る人達は高齢化していくとともに少なくなる一方で、若い人達の世代には歴史の真実が伝わらないまま忘れ去られてしまうのではないのかという一抹の不安を憶えます。当時は、現在のように情報化時代ではなく、すべての村民が老若男女を問わず驚の差こそそれぞれの違いはあっても一様に重大な興味を持って受け止めたのです。その時の幼い私は当時その中の一人でした。私が一番知りたかった米軍戦闘機不時着の状況を目撃した人がいたことに感動しました。戦闘機私の幼い頃にタイムスリップさせられたのです。それでは、どんなお話であったのか紹介しましょう。

「昼ごろ、一機の米軍戦闘機が幸世上空を旋回しはじめ、やがて川づたいに沼より成松方面に機首を下げ、柳町橋の北より電線をくぐり、機体を持ち上げたかと思うと柳町橋をこするように、東寄りの川原に、左の翼を土手に乗せ不時着しました。その後、パイロットを校長室で見かけたとか聞きましたが、この間全く空白です。」(谷本敏晴「幸世に米軍戦闘機が落ちた日！」会報『幸風』第九号)というお話です。的確に詳しく伝えられていますので、私の幼い頃の思い出の風景の中によみがえって来るのです。

それでは私の幼い頃に米軍戦闘機が不時着した当時の心に残る風景の旅へ出かけようと思います。確かに米軍戦闘機が不時着したその日の天候は晴れていました。秋の刈入れも終わって肌寒さを感じる初冬の季節だったことは確かです。私は昼休みの時間に同じクラスの仲間数人と校庭で遊んでいる時の出来事だったと記憶しています。先に紹介した画家の臼井邦昭さんは、戦闘機が幸世の上空を旋回したといわれています。この時、私は教室の中でした。校庭で遊んでいる時に今までに聞いたこともなかった大爆音を耳にしたのです。冬晴れの昼間ですから雷の「いかづち」の音ではないのです。遠くの方からゴウオーゴウオーとだんだんに大きな爆音がしたかと思うと、ガッシャンという高い金属音にびっくり仰天したのを子供心に憶えています。校庭の西の佐治川の方角から音がしていました。校庭で遊んでいた上級生や同級生達と私も一緒に佐治川の土堤に向かって一目散に走っていったことが記憶にあります。戦闘機が不時着した日の謎を紐解く鍵は旧幸世村役場や幸世小学校に記録が残されていると思われるのです。その当時のことが、幸世村役場の日誌とか幸世小学校の職員日誌などに克明に綴られていたのではないのでしょうか。五十余年が過ぎ去ろうとしている現在に至っても幸世にその存在すら忘れ去られているとは思えないのです。戦闘機が不時着した日の解明が待たれます。

三婆「土夢」に集う

木村 つた江（市島町）

平成十三年四月十二日、八十五歳のクラス会が旧鴨庄村上牧（現市島町）の料理屋分で開かれました。今は鴨庄小学校の斜めに店があり、その二階からは丁度満開の桜が手に取るように眺められました。

十一時半頃に今に集った級友は、東京から帰郷した私たち二人を含めて七名。うち女性は私一人でした。昨年は女性が三人でしたが、今年は村の旅行と重なったとかで欠席されました。昼食はなかなか気のきいた日本料理で会が始まったのですが、誰もがお酒の量は年々減り、酔って騒ぐ者もなく静かな宴会でした。

でも、一年振りにみんなが元気で集うことが出来たのには、村在住の方が世話役を引受けて下さったお陰と私は感謝しております。

和やかな歓談が数時間続き、午後三時半頃お開きとなりました。来年の集いを約して別れましたが、果して実現出来るのか誰も保証はしてくれません。でも夢は持ちつつ生きて行かねばと思わせられたクラス会でした。

会が終って、私は今の車に送られ北奥の妹（つる子）宅に行き、一泊しました。翌日、十時過ぎ、末妹（たま子）が友人の運転する車で二人を迎えに来てくれましたので、その車に便乗して春日町国領にある町営の保養所に向いました。その名前を妹から「どむ」と聞いた時は、語呂が悪いので何故こんな名をと、思っていました。が、「土夢」の看板を見て納得したというわけです。

三人が「土夢」に着いたのは十一時半頃でした。中年の女性に案内されて二階に上ると、和室の入口の札に書かれた「とうもろこしの間」に私は一人で納得して面白がっていました。隣が「とまとの間」廊下を挟んで前の間が「きゅうりの間」でした。土夢の建てられた理由は、この近辺に貸農園があり、その借主たちが都会から来て、農作業をし、泊って楽しむために利用されるのが主な目的だったようです。

私たちは、玄関脇の食堂で軽い昼食をすませ、二階の「とうもろこしの間」に戻り、持参のデザートを食べながら、誰言うともなく、子供の頃の母への思い出話になりました。

「あんなたち、小さい時にお母さんについて一番印象に残っていることって何かしらね」

と、私が二人に尋ねました。と、たま子が先に言いました。「昼寝から覚めた時に、必ず枕元に紙に包んだおやつがおいてあった。大抵は、おかきだったり、砂糖つきいり豆だっ



「土夢」の前の坂道で

た。それを布団の中で食べながら、絵本なんか読んでおとなしくしとった。でも何か淋しかった、雨が降るのを待っていたわ、雨降りはお母さんが家に居ってやさかい嬉しかった。そしたらこの間、長男（五十歳）も同じこと言うていたわ、雨降りが好きやったと。親子って面白いわね」

「わたしも同じや。よい天気ばかり続くと、早う雨が降ればよいのにと思とったわ。学校から帰った時、いつもお母さんの姿が見えないので淋しかったんやね、おばあさんは家に居ったつたのに」

とつる子も同じ気持だったようです。

「わたしは、お祭やお盆などで親戚の人が大ぜいこられるで

しよう。その日はお母さんはよそ行きの着物を着て、ご馳走を作っていたわ。そんな姿をみるのが大好きだった。鯖の姿ずしや、のり巻きなどを大皿に一杯盛ってお客さんに出していたのが今でも目に焼きついているわ」

私は親孝行について聞きました。

「わたしは未だに親孝行らしいことは何もして来なかったと思うわ」

とたま子が言ったのです。つる子も続いて言いました。

「わたしだって、これと言って何もしてないわ」

「そんな事ないわ。たま子さんは、気むづかしいお舅さんによく仕え、よく働き、教育者のご主人の陰の力となり、三人の小姑たちとも仲よくし、円満な家庭を築いて、実家の両親には、何一つ心配かけてないでしょう。それが何よりの親孝行よ。つる子さんにしても、近くに嫁いだせいもあるけれど、お舅さんお姑さんに気がねしながら、実家の農作業を、ご主人と二人で手伝ってあげたんでしょう何年間も。両親はきつと大助りしたでしょうよ。ほんとうにご苦労さんだったわね」と私は心から感謝しました。

「私なんか、お母さんを喜ばせたのは、新高バナナキャラメルを送ったぐらいよ。『東京のキャラメルは、ここのよりずつと美味しい』と言ったんだって。そしたら『どこで買ってもキャラメルは同じや』言っって誰かが笑ったそうよ。キャラメルは同じや』

ラメルといっしょに東京の商店の名入りの手拭を送ったの、それが又お母さんの自慢だったらしいわ。近所の奥さんたちに見せびらかして、毎日被っていたそうよ」

三人の思ひ出話は尽きそうにありません。いつの間にか夕闇が迫っていました。すると、先程の女性が二階に上つてきました。この人は近くの農家の主婦で川口さんと言うことでした。川口さんは襖を静かに開けて言いました。

「お夕食の用意ができましたので、こちらに運ばせて頂きます」

やがて運ばれてきた手作りの日本料理に三人は舌鼓を打ちながら大満足でした。

暫くして川口さんがお膳を下げて来て、「お風呂が一階の奥にありますさかいどうぞ」

と言つておりて行きました。八時過ぎ三人は風呂に入りました。昼食の折に見かけた私たちの他に二組の若い男女の客がいたようでしたが、風呂は三人の貸切りでした。風呂から出て部屋に戻るともう床が延べてありました。

「ありがたいわね。サービス満点で、申訳ないみたいだわ」

私たちは、布団の上に坐つて又おしゃべりを始めました。

中年の働き盛りの主婦がよく懂れていた言葉に『あげ膳、すえ膳で二、三日暮してみたい』と、私も思ったものです。私たち三人は、今その夢が叶えられているのですが、少々歳を

とり過ぎました。でも、健康でそれぞれ家を守り、一人暮しを楽しんでいるのですから、とにかく感謝しなければならないわね、という結論になりました。そして、これからは自分の体を大事にしながら一日一日を楽しく生きて行くことと、来年の再会を約束したのです。

私には、山の朝の空気は格別美味しいように思われ、窓をいっぱい開けて大きく深呼吸をしました。八時頃、川口さんが朝食を運んで下さいました

土夢の周囲には特に見る箇所もありませんので、私たちはよもぎを摘んだり、畦道を散歩したりして、美味しい空気を存分に吸いました。時計を見ると十二時近くなっています。

昼食は、軽くうどんを食べ、再び二階の「とうもろこしの間」で寝ころんで又おしゃべりを始めました。

つる子の長男が、三田市から車で私たちを迎えに来ることになっていました。途中で渋滞がなければ二時過ぎに着く筈でした。二時前に、

「ポットのお湯ありますかいね」

と言つて川口さんが上つてきました。

「すみません。もうすぐ帰りますから……」

とたま子が言うくと、川口さんは

「かまいしまへんで、今日はこの部屋の予約はありしまへんさかい、どうぞごゆっくりしとくんははれ」

私は久々で聞く丹波弁に懐しさと安らぎを感じ、立上りかけた腰を再び落ちつけてしまったのです。三時頃迎えの車がきて三人は帰途につきました。

「土夢」は、まさに老婆たちが誰に気がねもせず、一日中寝ころんでうだうだ言いながら休める憩いの館です。一泊四食付で一万円そこそこの低料金にも大きな拍手を送りたいと思えました。ちなみに「土夢」は今秋から民営になるそうです。

ふる里の古刹——高源寺——

村上久夫（春日町）

故郷丹波には鎌倉・京都に勝るとも劣らぬ古寺名刹が沢山ある。昨年、紅葉には少し早い中秋の一日、青垣町松倉の高源寺を久々に訪れた。氷上町青垣町辺りは道路が立派に整備され、大型店が進出し車の交通量も多く、全く昔の田園風景の面影はなく唯々驚くばかりであった。しかし旧神楽村辺りまでくるとさすがに藁葺きの家は見当らないが、昔日の農村のたたずまいが残り心が安まる思いであった。

この辺りはかつては煙草を産し、桑の栽培が盛んで養蚕業を営む農家が多く、柏原の不二蚕糸に勤務していた若かりし

頃、自転車で女子従業員の家庭訪問に訪れたことをなつかしく思い出した。

西脇へ通じる国道四二七号の傍らに立つ「西天目山高源寺もみぢ寺」の標柱を左折すると松倉の集落に入る。朱塗りの小橋を渡ると緑濃き山を背にして高源寺の堂宇が樹間に点々と見える。実に雄大な美しい景観である。兵庫県はこの寺を自然公園に指定し県内十刹の一つとして宣伝しており、寺の外苑としてもみぢ公園が新設され、広大な駐車場も設備され紅葉のシーズンには賑うようである。

高源寺は瑞巖山と号し、正中二年（一三二五年）遠谿祖雄禪師の開創による臨済宗中峰派の本山で根本道場である。甲斐大和（山梨県）の武田信玄ゆかりの栖雲寺が東天目山といわれるのに対し西天目山と呼ばれる丹波屈指の名刹である。

寺の縁起によれば開山の遠谿禪師は佐治庄の地頭職であった山垣城主足立遠政の孫で、足立光基の三男で十九歳で出家、徳治元年（一三〇六年）二十一歳のとき中国の杭州へ渡り、天目山の普応国師（中峰明本）のもとに参禅、修業すること十年、幻住一流の心印を受け、正和五年（一三一六年）に帰国して丹波の土を踏み、佐治郷小倉の岩屋に於て靈夢で得た中国の天目山に似ているとて庵を結び、正中二年（一三二五年）に堂宇を建立、中峰派の宗風を挙揚した。その宗風が中央に聞え、嘉曆元年（一三二六年）には後醍醐天皇より高源

寺号を賜り臨濟宗中峰派の本山となる。十世智伝和尚の代には末寺三千に達し小倉から桧倉の現在地に移り益々栄え、歴代住職はみな名僧の誉れ高く天皇の勅願所となり紫衣を賜った。

しかし、天正年間（一五七九年）明智光秀の丹波攻めの兵火により堂宇悉く焼失し、一時は衰微し僅かに法灯を維持する時代もあったが、享保のはじめ（一七一六年頃）二十四代天岩和尚が出て再興につとめ、寛政十一年（一七九九年）二十九世弘巖和尚の代に柏原藩主織田公の援助を得て復興工事にかかり、堂塔を整備し現在の高源寺の伽藍が形造られ、京都五山の勢力を抜く程その



名を全国に知られた。故に当寺では天岩和尚を中興開山、弘巖和尚を最中興開山としている。

心を新たにして古びた簡素な総門に立つ。「丹丘勝処」の扁額は紅葉の名所であることを示している。弘巖禅師の建立で織田公の寄進によるものである。総門を入ると雰囲気は一変し幽

邃の気がみなぎり、楓の木洩れ陽を映して苔むした自然石のゆるやかな石段が続く。この参道は正に楓の廊下ともいうべく坂道の両側から下枝を這わせた寂びた楓の老木が並び山門へと導かれる。丸味をおびた敷石は数多くの修行僧や善男善女により踏まれたものである。足の運びも心なしか一歩一歩に雑念が払われる思いである。傍らに「何の木の花とも知れぬにほいかな」と刻まれた芭蕉の句碑がある。

やがて山門に至る。紫鳳楼と言い手すりのついた楼門は寂びがあり風格をおほえる。やはり弘巖禅師の建立で楼上には釈迦説法像と十六羅漢像が安置されており、天井には禅師筆の極彩色の天女図が画かれている。少し昇ると仏殿がある。法王殿とも言い、当寺の本堂で享保年間（一七二〇年頃）天岩禅師が建立したもので、本尊の恵心僧都作の釈迦如来座像と法衣を着用した後醍醐天皇の法身像、小野篁作の如意輪観音像が祀られている。

仏殿をすぎ山砦を思わせる大石が組み合わされた急な石段を上ると広々とした境内に方丈がある。積善堂と呼ばれ弘巖禅師の建立による大きながっしりした建物である。静かに方丈に座し境内を眺めると正に幽邃の境、寂境で我を忘れてしばし見惚れる。作家の水上勉氏もその著「日本の風景を歩く 丹波・丹後」の中で「誰もが訪ねる大徳寺の石畳や大原三千院の参道も美しいけれど、高源寺に比べると格段の差があ

る。ここには鬼気せまる禅機がみなぎり身をおいただけで肝を洗う空気がある」と当寺のたたずまいを絶賛している。

山内の谿谷にかかる三笑橋を渡ると老木に囲まれて三重塔がある。天明年間（一七八〇年頃）弘巖禅師により建立され輪藏という建方で飾り気のない素朴な建物であるが気品があり実に素晴らしい。谿谷を流れる水の音を聞きながら塔の前にたたずむ時、世の俗念が自ら払われる思いがする。堂内には五〇四八巻の経文が納められ、印度毘須鳩摩作の開運毘沙門天が祀られている。この三重の塔は県指定文化財である。

その他境内には達磨大師像、地藏菩薩像、六体地藏像など石仏も多く、植西定子と丹治多門の悲恋と短い一生を憐み菩提を弔った幽霊の親子塚もある。又、国指定重要文化財の「絹本着色普応国師像」はじめ多くの寺宝、文化財が所蔵されている。

京都、鎌倉には夫々五山あり、大小の古刹も多いが大半は今や観光寺となり幽邃の境とは言い難いが、当寺は都会地を遠く離れているために俗化されていないのが最大の魅力であり、この大自然は四季折々の美しさがあり、二百年を経た立派な建造物と共に大切な文化遺産である。因みに約一万平方米メートルの境内と参道を埋める楓は開山遠谿禅師が中国より持ち帰られた天目楓でその数五百本余である由である。

当寺第十七世嘯岳禅師は二回入唐し、斯宗甚深の妙味を極

め、元龜元年（一五七〇年）正親町天皇より紫衣を賜い、同二年毛利元就が死去するや輝元、隆景の招きを受け、その菩提寺山口の洞春寺の開山となる。先年同寺を訪れた際、同寺のパフレットにこのことに関する記載の誤りに気付き御指摘申したところ、後刻同寺の老師より丁寧な書面を頂いたことも幸いです。

昨秋、訪れた時御住職の山本師が貴重な時間をさいて下さり、色々とお話を承ることが出来たことは何よりであった。私が何気なく話したことから八王子市山田の臨濟宗の名刹広園寺の丹羽老師が幼時から高源寺で修行されたことを承り、御紹介して頂き、一月末に同寺を訪ね快く会って頂いた。同寺は都内唯一の完全な禅宗様式を残す古刹で、境内は自由に見学出来るが建物内や名庭園は非公開である。私もこの寺が好きで三度も訪れたが四度目の今回高源寺のお蔭で雲水さんに内部をくまなく案内して頂くことが出来、老師自らお茶をたてて頂きお話を承ることが出来た次第である。神楽小学校同級の〇〇ちゃんとは今も交際があるとか、丹波の苦しい修行時代をなつかしみ、丹波弁でとつとつと思ひ出を語られた。これも仏縁と訪問を殊の外喜んで頂いた。

高源寺よりの帰途、道の駅「おいでな青垣」で黒豆の枝豆を買って帰り、丹波の味を堪能することが出来た。此の度の高源寺訪問は実にたのしい故里の一日であった。

旧生郷中学校の恩師

大塚 秀 式（氷上町）

生郷中学校（現氷上中）に入学したのは昭和二十七年（一九五二年）である。校舎は小学校の校庭と講堂を挟む形で建てられたばかりで、生徒数は六クラス二〇〇名程だったと思う。今思うと実に時間も気持もゆとりのある中学校生活であった。私の担任は三年間、高見輝美先生で、教科は英語であった。いつも紺のスーツ姿で他の先生方と較べると随分おしゃれで、きちんとされていた。なにせ、クレープの下着姿で堂々と授業をする先生がいた頃だから。ベルトのバックルがトンボ鉛筆のマークなのでトンボといつか言ったら、叱られた。あとで調べたら同志社大学のマークだということが分かった。実に真面目で、はめをはずさない先生だった。村内に住まわれていたように記憶している。

国語は、最初、畑中先生だった。成松に住まれ、野球部の監督だった。背が高く、髪を長くして、顔にかかる毛を手で掻きあげていた。腰にはいつも手拭をぶら下げ、下駄を履いていた。当時、独身だったと思う。私は野球部であり、市辺に住んでいたので、野球部の練習で遅くなった時など、帰

宅途中で自転車の後ろに載せてもらった。男っぽいというか、硬派で、好きな、尊敬していた先生の一人であった。

私は一年生で唯一のレギュラーだったが、父がすぐ側の役場において（村長）、よく練習を見に来ていたからかも知れない。しかし、私だけが、一年生では練習を休まなかったからかも知れない。当時は、農家をはじめ中学生も貴重な労働力であったから、毎日遅くまで野球ができるというのは恵まれてもいたわけである。ともあれ、その年、氷上郡の大会で優勝したのである。バッテリーは、三年の岩本さんと二年の池上さんだった。

しかし、英語も国語も授業中は半分寝ていたような気がする。野球だけが生活で、父も母もそのことを心から支援してくれていたから。（と思っている）

国語の先生では、田中先生も忘れられない一人である。唯一の女の先生で、何かの折、子供を自転車の荷台に載せておられたのを見たことがあるから、たぶん、結婚されていたと思う。先生とは、「文芸」というノートを個人的に見ていただいていた。少女趣味というか、文学少年というか、くだらない文章を書いては先生に提出し、赤ペンで何か書いて頂いていた。今もそのノートを見ることがあるが、当時、母も病で寝ていて、甘える人を求めている、先生もそのことを知っておられたのかも知れない。

善積先生も忘れられない。「おにぎり」というあだながついていたが、顔の型からついていたのか分らない。数学の担当だったが、音楽の先生がいないということで音楽をも教わったことがある。そこでついたあだなが「もとい」だった。ピアノを弾き始めるとまもなく「もとい」となり、先に進まない。音楽のテストでは、私など一小節も歌わせてくれない。それで、通知表はいつも一だった。別にかまわなかったが、生涯音痴のままで終りそうなのは、先生のせいかも知れない。しかし、好きな先生の一人だった。

キンちゃんに敬礼!

足立 正美 (青垣町)

戦後間もなく少し戦後の混乱が落ち着いた頃、丹波の夏、午下りの県道にカッカカッと靴音が響いていた。舗装されていない靴のある乾き切った幅三〜四米の道、土埃がひどい。道端の虫に喰われた生い茂った雑草、細いススキの葉にも土埃が厚く覆われている。それに続く水田の稲もけだるく見える。蟬捕りに行く村の十歳前後の子供が四、五人、道いっぱ

最後になってしまったが、山本校長先生も忘れられない。ほつぺたが赤く、いつも背筋をしゃんと伸ばした方だった。生徒会長をしていたこともあって、何度か校長室でお話を伺った記憶がある。

柏原高校では、娘さんが同級だったが、目茶目茶優秀だという話を友達から聞いたことがある。私は話をした記憶がない。しかし、何故だか、山本先生の自宅の庭で娘さんと一緒に写真がある。たぶん、豊中高校へ転校した後、ご自宅へお邪魔したことがあるのだろうが、全く記憶がない。

いに広がって歩く。カッカカッカの音に気付き慌てて路肩に一列に寄って歩を速める。向うから反対の路肩を足音をたてて歩いて来るのは一米八十糎はある大男、ボロボロの軍隊用の外套をまとい、口の開いた軍靴をはいた異形。しかし姿勢は良い。歩調も規則正しく力強い。子供達はすれ違う一歩手前で年長のタカシが「キンちゃんに敬礼!」と号令を掛ける、皆一斉に敬礼をする。女の子の愛ちゃんも軍隊式の敬礼をする。大男はゆつくりと、しかも威厳のある敬礼をし、何か口の中でブツブツと口ごもる。そして振り返りもせず去って行く。子供達は脱兎の如くその場を駆け抜ける。キンちゃんと道で会った時は一人の時でも「キンちゃんに敬礼!」は子

供達の間ではきまりになっていた。何故だったかはわからな
いがそうしていた。桜の老大樹にたどりついた子供達は日陰
の岩、草原に息を切らせながら坐ったり、仰向きに寝そべつ
たり、樹に寄りかかったりした。そばを流れる小川に入り、
鉄をふり上げる沢蟹を小枝で追う子もいる。

しばらくして、それぞれがキンちゃんについて話し始めた。

「キンちゃんは恐ろしいなあ、」「うちのばあちゃんは、キン
ちゃんは乞食や言うとしたで、」「違う違う、兵隊にとられ
て戦争で気が狂うたんや言うとしたで、」桜の老大樹には蟬
が信じられないほど沢山止まって羽を震わせ鳴いていた。色々
な種類の蟬、チイチイ蟬、アブラ蟬、ミンミン蟬が、手を伸
ばせばすぐに捕れそうだった。

「いつでも山の方から決まったように来るけどどこに住ん
どるんじやろ?」「うーん」「あっちの方には二十軒くらい家が
あるんじやて、」「誰と住んどるじやろか?」「あんな汚い、
破れたもん着て、洗濯したり繕うたりする人が居らんさかい
一人もんにきまっとる、」女の子らしい感想を話す愛ちゃん
はおかっぱ頭で愛敬のある素振りと口振りで話す。「親も居
らんのにどうしてこんな所に住んどるんじやろ?」「うーん」
「キンちゃんは何歳かなあ」「三十五くらいと違う?」「もつ
と年寄りやで」「ほんなら何歳や」「五十過ぎ、父ちゃんと同
い年くらい」愛ちゃんは「ふけて見えるけど、もつともつと

若い。背筋はしゃんと伸びとるし、歩いてる時の足は速い
し」「うーん」「そんで何歳やて愛ちゃんは思うんじや」「ま
あ二十五歳から二十七歳やなあ」キンちゃんの髪はぼうぼう
に伸びからまっている様な所もあった。不精髭が顔一杯に覆っ
ている。外套の下にはシャツはなかった。木綿のカーキ色の
ズボンの膝の所は破れている。汚れた胸元は遅しく見えた。
ゴシゴシとかきむしるのは癖になっているのか、誰が見ても
尋常な人の風体ではなかった。

あれから五十五、六年を経たある法事の席、初老の男達の
酒宴の席でキンちゃんの話が出た。「あ、いつも汚い戦闘帽
被った見素ばらしい人やったなあ」「そんな人おったか?
覚えとらんなあ」「狂ってたけど立派な体格した人やったで」

こんな会話が交わされていた。

これからはあの時、キンちゃんとすれ違った子供の一人が
キンちゃんついて想像する創作の話である。あくまで推測の
域を出ない話として読んで貰いたい。

キンちゃんは青年将校であったと思う。外套を支給されて
いるから当然寒い外地に出征した。そして或る日、しばらく
続いていた戦争で大変に緊迫した状況、例えば十人くらいの
小隊が何らかの事情で孤立した状況に置かれたのだ。激しい
戦いが続き傷を負う者、死んで行く者、指揮官も銃弾にやら

れ深手の傷を負った。キンちゃんはその上官に呼ばれた。

「俺に代わってお前が小隊の指揮を取れ。全てはお前に託す。」「職務を全うせよ。」「キンちゃんにとつて思いも掛けない重責がのし掛かつてきた。上官は息を引き取った。軍隊は色々な出身地とか個人の肉体的強弱、背の高さ等のバランスを考えて隊を編成すると聞いた。それは個人の特色を活かし、被い合い、補い合うことで隊の力が充分に發揮出来るのだとのこと。どのように一兵卒でも失わずに戦うか、軍隊はそれを考えるところです、軍隊にいた人はそう教えてくれた。さて戦況は益々激しさを増す。吹雪の中銃声が耳元を裂き、砲弾は近くに次々と炸裂する。戦いはどうも劣勢らしい。進退はきわまる。即刻の判断に迫られる。交信も途絶えた。「国のため陛下のため、自分の命は捧げてある。退却は日本軍人の恥だ、今、突撃あるのみ。」「血気にはやる若い江戸っ子兵士が促す。「こんな時、突っ込んだら犬死や。ワイには嫁はんも小さい子供も三人居る。犬死出来へん。せめて戦況がわかるまで待てんのか?」古参兵が叫ぶ。

キンちゃんは百姓の子として生まれた。農耕用の牛一頭と鶏が数羽、それに四〜五反の田んぼと山すそにやせた二反程の畑しかない貧農の家だ。尋常小学校を出たばかりで母一人子一人の農家ではもう一家の働き手として朝から晩まで額に汗していた。小学校では向学心旺盛、頭も良く、駆けっこも

早かった。「百姓に学問はいらん。早よう家の手伝いをせい。」「あの頃の田舎、百姓家では常識であった。そしてラジオも新聞の購読もしてないのが普通であった。正月と盆にはちくわ、蒲鉾、いわしの目ざしくらいは買った。御馳走もうれしかったが、それらの品を包んであった新聞、雑誌の一枚一頁がキンちゃんの楽しみ、丁寧にシワを延ばし、読めない漢字は飛ばし読み、挿絵の美しい娘の姿に胸をときめかせていた。

赤紙で召集されるまで大阪はおろか柏原、成松も知らずに過ごしていたのでは? 何年かの軍事訓練で、体格のよさに加え素直な性格、勤勉さは、色々な知識をいっきに身につけ抜群の成績を納めて少尉ぐらいまで出世したのでは? そして戦地へ出征。当時の丹波の人は引っ込み思案、遠慮深く、辛抱強い。悪く言えば積極性に欠ける、といった性格の人が多かったように思う。軍隊経験のある人の話では「突撃!」と言う命令に一番に飛び出すのは東京、九州、広島出身者で何時も後に続くのは北国の人、山国の人だったそうである。目立ちたがり屋、調子者、勇敢な人、積極的な人、そう言えば芸能人等派手な職業には一番に飛び出す地方に多い。キンちゃんは雪とか寒さは丹波で経験しているとはいえ、こんな零下10℃〜20℃という寒さは初めての事。ここ何日もロクな食事も取れず、疲労と手足の感覚の麻痺。兵隊達はイラ立っている。

どうすればこの苦境から逃れられるのか？比頃は前線でもすでに敗戦の色濃いことは周知のことだったと聞く。キンちゃんはいじつと目を閉じている。兵隊は見守る。キンちゃんの脳裏には故郷の山、川、老いた母、山桜とか牛、田んぼが浮かんでいる。村人、友達、消えては浮かび消えては浮かぶ。望郷という言葉をこんなに肌で理解した人は居ないのではないか？天皇陛下、上官、軍隊生活を混じったかもしれない。どれだけ時間が経過したのか。キンちゃんはゆっくりと立ち上がった。そして叫んだ「○○部隊、○○小隊はただちに○○方面へ撤退する」指揮官として初めての命令を下した。持ち前の粘り強さ、沈着冷静さで困難な道程を無事小隊を後方の大隊まで導いた。十名の命は救われた。でもこれではキンちゃんが狂うことはない。退却の途中、兵隊は更に弱って来た。「天皇陛下、万歳！」と倒れる者も出るはず、「重い物は捨てろ！」「身軽になれ！」手榴弾とか予備の銃弾等捨てる命令も下した。中には銃まで手離す兵隊もいたろう。キンちゃんは十名の命が第一と黙認した。後日、軍法会議の被告席にキンちゃんがいた。「敵前逃亡！」「下賜品の遺棄！」

罪人となったキンちゃんは或る日、獄中で頭が割れるほど痛くなり、目の前が真っ白な世界になってしまった。その時キンちゃんは全ての記憶をなくしてしまった。傷兵として送還されたキンちゃんを待っていたものは、今だに神風を信じ

日本の本土決戦勝利を疑わない村、村人達、親類縁者も重罪人の扱いに途方に暮れた。その上間の悪いことに、半年前家の前を流れる小川の十数センチしか水深のない流れに顔を埋めた一人暮らしの老婆の死体が早朝に発見され騒ぎとなった事があった。野良着の上には沢山の蚤が蠢いていたそうだ。キンちゃんのお母さんだった。すでの話は伝わっていたのか？当時の軍国の母は自ら命を絶つ事もあったろう。荒れて何もない我が家に帰って来たキンちゃんには何も理解できなかったろう。キンちゃんが山を降りて来た時お稲荷様の前で目撃した。手を合わせ目の前の供え物を懐にして去っていった。まだ軍人としての誇りがあったのだ。物乞いは出来ず神社、仏殿廻りで生きる糧を得ていたのだ。姿が見えなくなった時期ははっきりしない。戦後まで生きたのだから英霊ともあがめられず、忠魂碑にも名も刻まれずに生涯を終えたキンちゃん。キンちゃんが戦禍を被った並の兵隊だった記憶が間違っていたことを祈る。少年には郷土出身の勇者として、忘れないことにする。又戦争の悲劇も風化させてはならない事を祈念して筆を置く。



足立姓の源流を探る二題

「足立氏」の系譜をたどり
メールマガジンを発行

青垣町小倉の妙法寺住職で、元高校教師の竹内正道さんが、インターネットのメールマガジンで、家族論をテーマにした著作「家族の源流」を発表している。十世紀ごろ関東で生まれた足立の源流や、その後全国各地で活躍した「足立」氏の人物伝、「源頼朝の鎌倉幕府創立に大きな力を発揮した」などという壮大な話などが、今後展開されてゆく。

竹内さんは、足立姓の多い青垣町生まれ。子どもの頃から「足立」姓の多さを不思議に思っており、その好奇心から研究を始めたという。約三十年前には神戸市の「足立」の研究者から百八十冊にも及ぶ資料の寄贈を受けた。この資料を見るために全国から足立の

研究家が竹内さんの元を訪れるようになり、足立に関する情報が集まるようになったという。自身の研究と、この交流の中から出てきた多くの新事実をまとめ、執筆している。

メールマガジンは毎週金曜発行。購読は無料で、登録すれば誰でも購読できる。購読登録は、(<http://www.melma.com/mag/71/m00020671>)へ。百話完結を予定しており、半年ほどは鎌倉時代に費やす計画。現在は序論が終わり、本編が始まったばかり。(13・1・7付)

「足立」の家計図見つか

青垣町杉谷の足立慎治さん(62)方の土蔵から、足立家の家系図が見つかった。慎治さんの本家は、青垣の足立姓の祖・足立遠政公の流れだという。慎治さんは「私ではいつ頃のものなのかすら分かりません。研究にでも役立ててもらえれば」と話している。

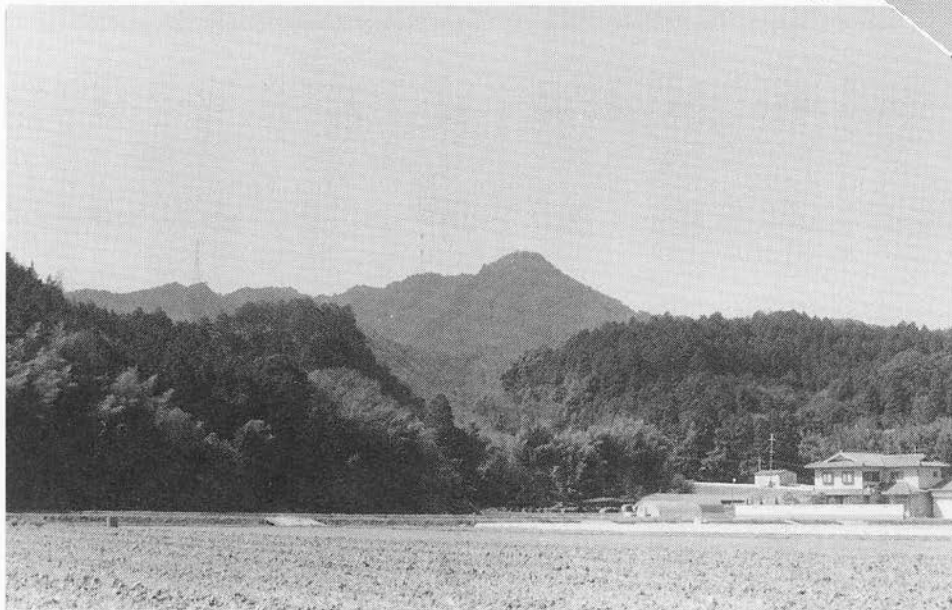
家系図は二つあり、ひとつは「足立家系譜」。軸装が施され、遠政の祖父の代から江戸時代後期と推定される当主の時期まで記載されている。特に江戸後期には、女子の嫁ぎ先など細部まで記載されている。

もうひとつは、藤原鎌足から始まり、慎治さんの叔父にあたる故・足立三郎さんまで歴代の当主が記されている。

慎治さんによると、遠政から続く足立の本家は、廃藩置県後大阪に移住し、今に至っている。先代の当主である三郎さんが、大阪で足立の研究をしていたことから、後者の家系図は三郎さんの手によるものと推定される。三郎さんが青垣を訪れた際、本家の書類などを慎治さん宅の蔵に納めて帰ったのだそう。

「本家の過去帳も手元にあるし、代々の墓も残っている。家系図と照合すれば、何か分かるかもしれませんね」と慎治さんは話している。

(13・3・1日付)



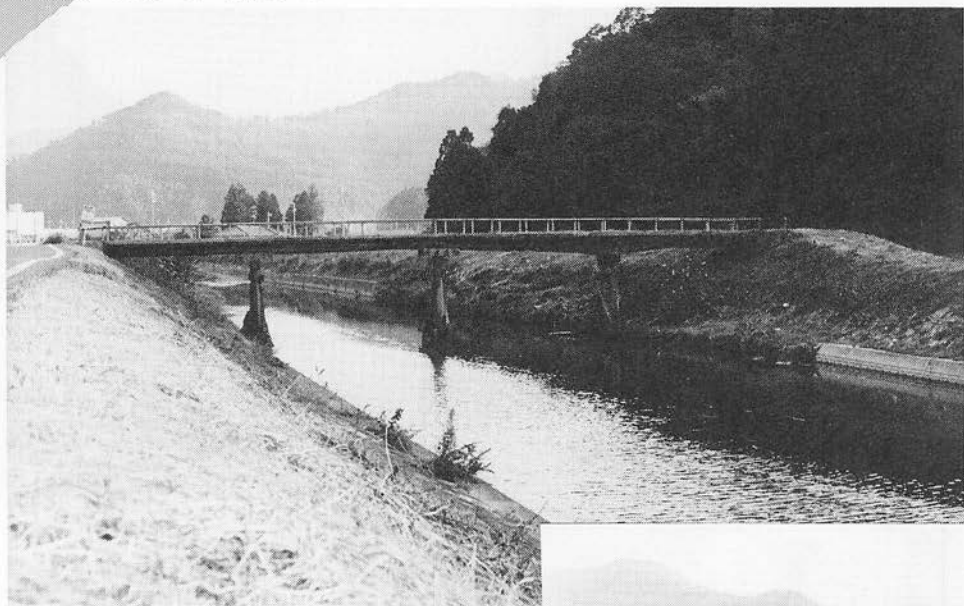
見えるでしょうか？ 頂上に聳える高压線2基（写真上、2000年3月）
何もなかった頃の高見城山（写真右、1999年）



氷上町稲継よりのぞむ
高見城山（1999年）

丹波を撮る

無念の流失！念仏橋



柏原町本町の柏原川に架かる念仏橋（1998年）

時代劇のロケにも使えそうな
木造の橋



1999年の集中豪雨で流失した跡



撮影
徳田八郎衛

バスが走る道

丹波を撮る



バスの終点・青垣町神楽地区大名草（おなだ）
柏原行時刻表
8:14 11:00 15:00 17:51

丹波を撮る 孤独なバス・ターミナル



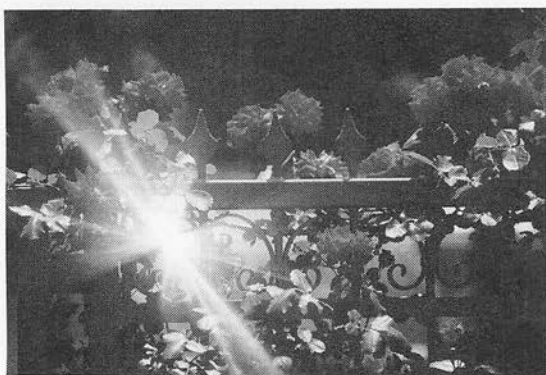
バスの終点・春日町大路地区野瀬。
柏原行時刻表

7:30 ☆12:30 13:50 ☆16:30
☆17:39 ☆は黒井止まり



始発便の運転手はマイカーでこの車庫に出勤し、18:48着の最終便を入庫させた後、マイカーで帰宅する。

近況・エッセイ



映画を見て考えたこと

岡田昌子（氷上町）

六月と七月に対照的な映画を見た。それらは中国映画「山の郵便配達」とアメリカ映画「ザ・コンテンダー」である。

「山の郵便配達」は一九八〇年代初頭、中国湖南省の山岳地帯を重い郵便袋を背負い、愛犬と二人づれ（？）で険しい道のりを二泊三日がかりで村人達に黙々と郵便を配達してまわった父親が、体力の衰えを理由に退職を決意し、息子が継承するというストーリーで、素晴らしく美しい山河や田畑の映像が心に染みる。

この映画は様々な文学賞を受賞したボン・ゼンミンの短編小説をもとに、フォ・ジェンチイが監督し、夫人のス・ウが脚本を担当しており、三つの賞を獲得している。

父と村人との心温まる交流、父の仕事への責任感を肌で感じ、尊敬の念を抱き始める息子、夫と息子を暖かく支え見守る母。美しい大自然の中で時間は静かにゆったりと流れ、人々のところはどこまでも優しい。電気や水道は勿論のこと何の娯楽もないけれど、人々は出会うことでこの交流は深まる。古き良き時代の人間模様を感動的に描いた映画であった。

「ザ・コンテナー」は人間の醜態醜さを政界を舞台に描いた内容で、女性初の副大統領となる主人公を取り巻く人間模様が描かれる。ロッド・ルーリーの脚本、監督であるが、娘のために書かれた作品ということである。

権力欲に支配され姑息な手段を重ね合う男性政治家の薄汚い策略の中で、女性故に苦悩せざるを得ない立場に立たされるが、政治家として信念を貫徹する主人公の有様は拍手喝采もので、政治家たる者、人間たる者はこうでなくちゃーと感動の涙を抑えきれなかった。「雄々しい」という言葉の対語に「女々しい」という差別語があるが、「雄々しい」という言葉と同義語にし「女々しい」という言葉を格上げして、女性のために使用したい思いで一杯になるほど、思い入れの強い映画であった。

二本とも映画を見終わった後、感動に震え涙が止まらなくて困ってしまった。人間の描き方は「静」と「動」と対照的ではあるが、原点となる人間の信念と信頼を描いた点では同一と言え、人間関係の創造的可能性を描いた映画ではないかと思えた。

最後に、あの感動の涙を分析してみると、環境破壊のない自然の美しさは、映像であっても心を癒してくれるものである。自然を満喫するためには時間とお金をかけないと入手困難な都会生活にあつては、黙っていても分り合える純粹で素

朴な人間関係はもはや成立しえない。

また、母は何時の時代もやさしくたくましく、家族を包み込むものであった。しかし、母として生きるには個を犠牲にするのが当たり前であったし、働く女性は母役割・妻役割と何役もこなすことが当然とされてきた。女性はいつの世も差別の中に生きてきた。いつだって、「女・子供」とひとくくりにされ、一人の人間として遇されることは難しかった。

雇用機会均等法、セクハラ規制、男女共同参画社会基本法、DV法等制度上は整備されつつあり、あたかも問題は解決され始めたかにみえるが、長年女性相談に携わってきた体験上、今でも、あらゆるところに女性差別問題は転がっている。

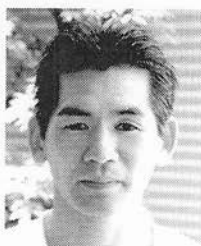
確かに、与謝野晶子が「山の動く日来る」と謳ってから、隔靴搔痒であっても少しずつ変化してはいるものの、それほど、人を差別するという問題は女性問題のみならず、差別している強者からは見えにくい問題であり、差別される側が人権を獲得することは難しい。

このようなことを考え、いとおしい人間が「生きること」に涙した映画であった。



笑顔との出会いの中で

山本 明 男（柏原町）



二〇〇一年の夏は東京新宿に居ます。小さなビストロを妻と二人でやっています。もう二三年前になるのですね。柏原から篠山までの約二〇kmの自転車通学は、頭の中がボクシングのことはかりだった自分にとって、

足腰・心肺機能向上のための手段でした。

今日はトンネルまで何分で：今日は一番重いギアでトンネルまで：そんな日々でした。その位の思いで勉強しておれば、赤点など取らずに普通に卒業できたと思います。担任の先生にも笑顔でよく言われました。この笑顔に、そして友人の協力に支えられた（甘えていた？）三年間でした。

ボクシングにおいて、それなりの成績を残した自分に、複数の大学から声をかけて頂き、進路は〇〇大学となる予定でしたが、両親には申し訳ないと思いつつ、もう一つの夢の方に行かせてもらいました。料理の世界に入る決心をし、大阪の学校に一年、そして最初の修業の地は福岡博多でした。

なぜ九州なの？と皆々に問われました。自分なりのツッパリでもあった様に思いますが、東京・大阪は生きているうちに何時でも行けると言う思いもありました。社会人一年生となる場所を知人、親戚誰も存在しない所に選び、自分を放り出したかったのです。理由は簡単！弱い自分ですので逃げ道がないようにと……。

そして、もっと単純な理由もありました。テレビの画面で見ると高倉健さん、甲斐バンドの甲斐よしひろなど、男っぽい存在感のある人たちのほとんどが福岡出身だったこと。一度その地を感じて見たいと思って博多を選んだのです。ここでの出会いが自分の人生観を大きく決定づけました。

「山笠があるけん、博多たい」という様な先輩たちに手荒く可愛がられながら、当時、九州でフランス料理を食べるならあの店だと評価の高いレストランで修業したのです。そこで働きたい人も当然多かったのですが、なにせシェフの厳しさは半端でないため、よく続いて一ヶ月、早い人で三〇分と、辞めて行く人の数も底知れず、フランス修業の目標や、自分なりのツッパリがあったことから、自分も何とか頑張れた様に思っています。

だが二年四ヶ月後の七月、心臓疾患のためランニング通勤中に意識不明となり病院へ。命には別状ないとはいえ、立ち仕事、重労働、激しい運動は禁止と宣告され、博多での修業

は終わりました。泣きじゃくり、失意の思いで引越しの準備をしている時に、信じられないニュースが目に入りました。

日航ジャンボ機の墜落事故です。好きだった坂本九さんのことも伝えていました。厳しい職場の中で、いつも「明日がある、明日がある、前を向いて、上を向いて……」と自分を励ましていたので信じられませんでした。しかし、犠牲者の方々には失礼かと思いますが、自分は生きている、上を向いて歩くことも、夜空の星を見上げることもできる……くよくよするな！ 忘れもしない八月一二日、この日も暑い夏の日でした。テレビには坂本九さんの満面の笑顔が流れています。この時も自分を救ってくれたのは笑顔でした。

静養のため柏原の実家に帰り、近くの県立柏原病院に通う身となりました。友人、知人から勇気を貰い、少しづつ元氣になりながらも、今後の自分の生き方に苦悩する日々です。自分の通院費用位はと思い、両親の反対や心配をよそに、身体と相談しながらアルバイトも始めました。医師の言葉を受け止めつつも「病は氣から」。

なんでも勉強、吸収と思い、寿司屋や洋食レストラン、さらに芦屋の方まで脚を伸ばし、某有名パン屋からケーキ屋まで病院そっちのけでアルバイト（修業）しました。大阪でバイトをしている時のことです。自分の兄もお世話になったボクシングトレーナー、名伯楽エディ・タウンゼントさんが井

岡弘樹を世界チャンピオンにし、その数時間後にこの世を去りました。その壮絶な死を目にした時、生きることの意味を考えさせられました。

薄れゆく意識の中で、井岡の勝ちを耳にしたエディさんはニコッと笑顔を見せてくれました。この時も笑顔です。その時の決意、無責任な決意かもしれませんが、もし、また倒れたら、万が一のことがあったら……それはそれで自分の運命限界、ビクビクしてもしゃーないと思い始めました。

中途半端で終わった料理の世界にもう一度だけ身を置くことにしました。二五歳の時に千葉浦安のシェラトンホテルに入り、大きなホテルの料理の限界、いつも乍ら理想と現実とのギャップを感じつつ、少しづつではありましたが、この頃から運動（ジョギング）を始めました。自然と、触れ合うジョギング仲間の笑顔にも助けられました。

約六年間のシェラトン生活で、強烈な出会いの一つに、あのアイルトン・セナがいます。日本グランプリがあるたびにシェラトンに宿泊し、レストランにもよく顔を出してくれました。レース前後にも必ずジョギングをし、プロとして、一流アスリートとしての意識の高さに敬服しました。ジョギング通動していた自分も、毎年何度かお会いすることができ、挨拶を自然に交わしてくれました。

ある朝、セナさんの方から「グッドモーニング」と先に声

を掛けてくれました。普通にしているも男前のセナが、あの笑顔で言ってくれたのです。もう大スターとか何とかの次元ではなく、一人の人間として、心が透明になる様で、その日、一日元氣一杯でした。その約一週間後、セナさんはイタリアの地で帰らぬ人となりました。

そんなことの数ヶ月後、ある知人の奥さんが余命二ヶ月と診断され、私も何かできたらと思いいシエラトンと辞めました。ご主人が看病に専念できる様に、山梨県清里のペンション運営と食事療法などを買って出たのです。医師もびっくりするほどの回復で、なんとか三年八月元氣で居てくれました。その間、数々の人達と出会えて感謝しています。その一人で、昔から大ファンだった井上堯之さん（元スパイダースで日本屈指のギタリスト、作曲家）には今なお元氣を頂いています。誰もが、どうして？信じられない、という状況で清里を離れました。人間不信になり、日々、ボーとしていた様に思います。これからの自分を考える元氣もありませんでした。その時、救ってくれたのが井上さんの笑顔と言葉、そして妻の支えでした。

「たとえ明日地球が減ぶとしても

私は、りんごの樹を植える」

井上さんは、胃癌と闘いつつ、いつも笑顔で前向きです。

細い体でパワフルなギターです。「僕も弱い人間だから、こ

うしていないとダメなのヨ」と笑顔で言います。自分自身、落ち込んでいる暇などない、とにかく動かねば……料理については永いブランク、おまけに不景氣の風。あるのは応援してくれる方々の支えと笑顔と勇氣だけの様に思います。

チャップリンの言葉に「人生は、夢と希望と勇氣と、ほんの少しのお金があればいい」。ほんの少しのお金もないけれど、勇氣はある、妻の支えがある、笑顔がある！店の名は「りんごの絆」、井上堯之さんが命名してくれました。オープンして一年と四ヶ月、自分はキッチンで鬼の様な顔をしていても、妻は笑顔。男はわがままですね。女は強い、たいしたものです。こんな不景氣な時だからこそ、りんごの絆の様な空間が絶対に必要だとお客様は言ってくれます。こんな世だからこそ、救うのは笑顔だと思っています。

がむしゃらに登っていた鐘が坂峠、本当は桜も紅葉もきれいなのに、自分は全然、脳裏に浮かびません。この丹波の山ざるも、がむしゃらに新宿で頑張っていますが、何時の日か、ゆっくりと妻に鐘が坂峠の桜や紅葉を観せたいと願っています。



平凡な毎日の幸せ

本間 敦子（市島町）

平々凡々の毎日、これがどれほど幸せなことなのかとつくづく思い知らされる事件が起きました。六月の末のある夜の事です。

我が家で一番元気な、五歳のオスのゴールデン・レトリバー（名前をコロといいます。）を夜の八時頃散歩させていました。少し肌寒かったので早く帰ろうと思い小走りになりました。すると、突然コロが吠えながらダッシュしていったのです。私は必死でコロを止めようとしたのですが、無理でした。気が付くとブロック塀の横で倒れていました。靴はあちこちに散らばり、コロは、と見ると、庭につないである他家の家の犬の前で吠えています。頭がズキッときて痛ッと思ひ手をやると、みるみる大きなたんこぶができてきました。

シマッタ、大事な頭を打ってしまった。（たいした頭じゃないのですが、私にとっては大切）どんなふうになったのか全然覚えていません。多分、一瞬気を失っていたのでしょう。

コロを連れて、歩いて家にたどり着くまでの五分余り、様々な思いが頭をよぎりました。まず、無事に家まで帰れるか不

安でした。そして、バチが当たったとも思いました。実は四年ほど前から、主人の両親と一緒に暮らすようになり、いろんな心が出ました。自分の心に気付いてから、何か起こるんじゃないかとの懸念はありました。

今まで小さい家に住んでいたのですが、もう少し大きな家に住みたい、という夢も実現し、娘二人も、それぞれ良き伴侶に恵まれ（娘には、もつたいないような好青年です。）主人の仕事も順調で、良い事が続きました。だから、やはり来た！という感じだったので。すぐ主人に病院まで連れて行ってもらいました。その後の検査でも、異常無しで、本当に命拾いをした思いです。

「朝に紅顔ありて夕べに白骨となる」「一寸先は闇」というけれど、その通りだと実感させられました。新聞、テレビでは、毎日のように、いろんな事故や災害が報道されています。いつ我が身に振りかかってくるか分かりません。

「明日ありと思ふ心の仇桜」今日一日生かされたことに感謝して、生きていかなければと思います。しかし、凡人の悲しさ、のど元過ぎれば何とやらで、聖人のような心では生活できません。間違った心を軌道修正しながら、新しい事にも、チャレンジしつつ、年を重ねて行きたいと願うこの頃です。

日々を詠む

伊藤 富士子（氷上町）

『山ざる』誌は、遠い丹波を身近かなものにしてくれていきます。どんなに世の中が変わろうと、丹波の存在はあたたかく、懐かしいものです。離れ住めば、その思いは一人のものがあります。



今回編集部より寄稿の依頼があり、戸惑いもありましたが、私なりに思いを綴ることに致しました。昨年は夫が心臓弁膜症のために長時間にわたる手術を受けました。不整脈に悩まされていたものの、手術という予期せぬことに苦悩の日々が続き、大変な年でした。現在は、その過程を経ながら普段の生活に戻れるようになり、安堵しているところです。

誰にでも、人生には思わぬことが起こるのが世の常というものですが、世相も良き？につけ悪しきにつけ、いろいろな事が渦巻いております。そんな日々の中で、悲喜を素直に受け止め、冷静に対処出来るようになったのは、年のせいでしょうか。それとも、何年か前から自分流ですが、短歌を詠むようになってからかなと思ったりしています。短歌を詠む気持でいると、穏やかで、やさしい気持にもなり、また意識してものを見るようになりました。

難しいことは判らないけれど、短歌の魅力は詠んでこそ、その楽しさも実感出来ると思います。

日常の様々なこと、また旅に出るといふ非日常的な事など、いつでも、どこでもメモを片手に思いをふくらませ、歌の中で表現し楽しんでおります。全く自分流という自由さが楽しく、この時が私にとって、ささやかですが心豊かで穏やかなものを感じます。

私は、旅行が好きです。友人や家族とよく出かけます。日

常の雑事から離れ、旅に出るのは楽しいものです。普段の生活では体験できないことが待っています。風土、文化、観るもの聞くものが珍しく、いくつになってもワクワクしなげらです。

こうして楽しく過ごす旅も、その一瞬一瞬が過去となってしまうですが、三十一字（短歌）のことばの中では、カメラにおさめた写真と同じように、その時の情景が鮮明に残っています。その時々をメモにして、振り返りながら詠むことが多いので、再度旅の気分を味わっております。

ここで、駄作ながらその一端をと思います。

○雲ひくく浜風強きオホーツクのはるか沖より波うねりくる

○雨上がりの朝日まぶしく野に映えて新緑すがし山路ゆく

○麻文仁岳立ちてながむる青き海はるけき日々の戦いしのおぶ

○小雪舞う吐含山のふところに静かにたたずむ石仏みる

○ゆったりと流るるナイルの川沿いを荷運ぶロバの小走りに行く

○匈奴の防御に果たせし長城も今はのどかな旅人の群

○桂林の旅の途に見し豚の親子車さけつつ寄りそい歩く

日常生活にも、何気ないところに素晴らしいものが目に付きます。

ある時、友人との約束で街に出かけ咲きはじめの藤の花を見たと時、

○ビル街の古き民家の板塀にしだれ咲きそむ藤の花見る

買物に出かけるバスの車窓より、

○紅葉の山の頂きしぐれおり晴れ間に淡き虹のかかりて

春浅きわが家の庭で見つけたものは、

○雪どけの庭べに芽吹く福寿草春への息吹き待たれるときに

苦しい時は心を癒し、楽しい時は口ずさみ、これからも辛いこと、悲しいこと、また喜びにもめぐり逢うことでしょう。このサイクルの中で、楽しく詠みつづけられればと思っております。

山ざる編集部の方々に感謝しつつ、

○遠かりし丹波の思いつゝのるときそばに手にする山ざるありて

東の間のベネルクス・イギリス

生 田 清 弘 (柏原町)

この五月、私たち夫婦はベネルクス三か国と、ロンドン郊外に滞在中の娘たちに会うため約二十日間のヨーロッパの旅にでかけた。

〈欧州の中心、ベネルクス〉

一九五八年に「ヨーロッパ経済共同体」(EEC)の本部が、また、一九六七年には「北大西洋条約機構」(NATO)の本部が、ベルギーの首都ブリュッセルに置かれたこと、第二次大戦後は欧州の中心として「欧州連合」(EU)をはじめヨーロッパの諸機関がブリュッセルやオランダのハーグ、ルクセンブルクに集中して設置され、これら三か国がヨーロッパの統合と平和を実現するための要として大きな役割を果たしていることを、遠くで眺めている私たちには意外と知らないことが多いのではないだろうか。私も現地でいろいろ見聞するに及んで認識を新たにするとともに、今後のEUの足どりには幾多の越えねばならぬハードル、例えばユーロ(単一通貨)やEUの拡大などの問題が予想される中、新しい歩み

が現実に行進していることを実感した次第である。

美術愛好家にとり、この地域には見応えのある立派な施設が多く私たちは、アムステルダム国立博物館や、ゴッホ美術館、ハーグのマウリッツハウス美術館、それにブリュッセルの王立古典美術館、王立近代美術館、ブルージュのグルーニング美術館などを訪れたが、美術館以外にも各地の市庁舎や大聖堂などで著名な作品を鑑賞する機会が多く、しきりに感動したものだ。

オランダのデルフト焼は有名だが、十七世紀の東方貿易による中国陶磁器の輸入にはじまり、ペルシアや伊万里焼の影響も大きく受け、地元では外国製品の模倣と試行錯誤に加え、自らの新たな技術を積み重ねた結果、白地に青模様といわゆるデルフト・ブルーと呼ばれる名陶を完成させた。今回の旅で有名な王立ポースレン・プレスを見学できたのは幸いであり大きな収穫であった。

〈ホルチエスターという町〉

三か国を回りアムステルダムに戻りロンドン郊外のスタンステッド空港に向かったのが五月二十日だった。日本を発つてから幸いにも総じて好天に恵まれ気温も穏やかでこの日もよく晴れて、眼下に広がる田園の眺めは素晴らしく一時間も



コルチェスター郊外の「住い」のある風景

かりのフライトでスタンステッドに着いた。空港では娘夫婦に出迎えられ、旅のはじめから持ち回った孫たちへの土産物をはじめ荷物からやっと解放されホッとした気分。空港から一時間のドライブで住いのあるコルチェスターに到着したが、途中の景色は山がないので晴れた空は遠くまで遮るものがなく視界が広くて実に気持ちよかった。この町はロンドンの東北に当たるイングランドの中堅都市。

久し振りに合った孫たち（二人とも男子、上は中二、下は小五、文中ではRとJとしておく）も想像以上の成長振りで、特にRは背丈も伸び、話す内容もしっかりしているのには驚いた。Jは体つきこそさして際立つ変化はないが、やはり風俗、習慣、中でも言葉の壁にぶつかりながらもまれてきたためか甘えがとれ凛々しくなったように思えたのはひいき目か。一年程前日本を発つ時、これから始まる不慣れな生活を子供心にイメージしたのか、不安そうな顔をしていたことを思いだし、今、目の前で元気に振舞っている様子を見て安堵した。これが何よりも嬉しかった。

住いは市街地から少し離れた緑豊かな閑静な住宅ゾーンにあり、野鳥や小動物も頻繁に訪れる。家屋は英国風の三角屋根根の一戸建とセミ・デタッチ（Semi detached）という半分離式の二世帯住宅のようなものがあるという。通常家屋の前には道路との間にグリーンがあり、裏側には広

い庭があるものが多く、車や人通りも少なく落ち着いて生活の出来る環境だ。

庭には鳩やブラック・バードと呼んでいる鳥を小型にしたような鳥が群れをなしてやって来る。庭には相当高い木もあり、栗の木もあってこんな高いものは日本でも見たことがない。季節には栗拾いもするようだが、小鳥たちは木に止まっでさえずったり、芝生に降りて餌をついばんだりしている。

また、リスや珍客のハリネズミの訪問もある。ハリネズミは夜行性の動物なので夕暮れになると現れ用意してもらった餌箱から離れない。随分人に慣れていて、そつとタオルで包むようにして抱き上げるとじーっとしているが、抱きあげる瞬間は身構えて針を立てるので痛い。食べ終るといずこへともなく去っていくが、明日もまたやってくるだろう。ここまでくるとなかなか可愛いものだ。ハリネズミはこの地方の名物か、町の店にもぬいぐるみを売っていた。

「コルチェスターはイギリスで最古の歴史を持つ町の一つで、この町を歩くことはイギリスの興味深い出来事に満ちた過去二〇〇〇年を辿ることに他ならない。」と町の案内書に書いてあるが、イングランドにはこのように古い史跡や町並を残すところが多い。度重なる多民族の出入りの歴史がそれを物語っている。

ブリトンズ (Britons)、英国人、特にイングランド人)、ローマンズ (Romans、ローマ人)、サクソンズ (Saxons、サクソン族で、五、六世紀にアングル族、ジュート族とともにイングランドを侵略し融合してアングロサクソン族となる)、ノルマンズ (Normans、一〇六六年にイングランドを征服したノルマンディー人)、ダッチ・ウィーバーズ (Dutch weavers、オランダ織人)、ロイヤリスツ (Royal・王党员)、パーラメンタリアンズ (Parliamentarians、英議会党员)、およびヴィクトリアンズ (Victorians、ヴィクトリア女王時代の人々)らの遺産は今日、町の周辺や町内のキャッスル・ミュージアムをはじめ四つの博物館で見ることが出来る。

かつてイングランドやウェールズがローマ支配下にあった時代に、ロンドンを中心に道路を整備した際、要所に兵營 (Castrum) を置いた。地名に *caster*、*cester* 或いは *chester* のついたものは、このような兵營のあった名残だという。コルチェスター (Colchester) もその一つで今も軍隊が駐屯しているらしい。

コルチェスターの市街は、周りを城壁 (Roman wall、ローマン・ウォール) で囲まれた形跡を部分的に残しているが、今では全容を知ることができない。また、ダッチ



コルチェスターのショッピングセンター街

クォーター (Dutch quarter) と名付けられた一区画があり、おそらくオランダ織人の由緒あるところだろう。町の中央には東西に走るハイストリートがあり、東の入口には北側に広がるキャッスル・ミュージアムのあるキャッスル・パークがある。ハイストリート沿いの北側はホテル、レストラン、バブなどが連なり、タウン・ホールもこの道沿いにある。また、通りの南側の町並は商店街で幾つものショッピングセンターで構成され、デパートや各種の専門店が軒を連ねている。車も締め出され人通りも混雑はなく落ち着いてゆっくりショッピングを楽しむことができる。また、所々にきれいな花鉢を吊るしたり、花を飾った車を置いたり心の和む演出もイギリスらしい。

ちようびティータムとなったのでホテルのレストランで一休み、女性たちはスコーンとティーを、男性はティーならぬビールで喉を潤した。ショッピングをはじめ金額の多寡にかかわらず支払のほとんどがカードで済み、予想以上のカード社会になっていて大変便利だ。

コルチェスターとロンドン (リヴァプールストリート) 間は高速列車のインターシティで約五十分、朝夕のラッシュアワーにはやや車内は混むが日本のような「すし詰め」状態にはならない。また、イギリスの鉄道の特長な事情として私た

ちの常識ではちよつと考えにくいことだが、鉄道は完全に年中無休とはいえない事実があることだ。クリスマスや復活祭などの時期にはかなりの減便を行ない、特に十二月二十五、二十六日はほとんどの列車が運休するという。また、週末には職員も減る関係からよくダイヤが変更され、サービスも良くないらしい。ちよつとの滞在くらいではとても理解できないのがチケット。同一の乗車の区間でありながら運賃が幾通りもあつたり、自販機で買うのと窓口とで運賃が違つたりすることもある。日本でも料金については客の利用率の高い時期と通常時とで差のあることは承知しているが、そんな比ではないようだ。

道路を利用してロンドンに行く場合は通常、M (Motor way、高速道路) とか A (Main road、主要道路) の表示のある道路を走る。スタンステッド空港へもこのような道路で結ばれ、コルチェスターからは一時間。速度制限は表示がなければ M で七〇マイル (一一二キロメートル)、A は五十マイル (八〇キロ)、B 表示の地方道路では三〇〜四〇マイル (四八〜六四キロ) となつている。高速料金はほとんどが無料。

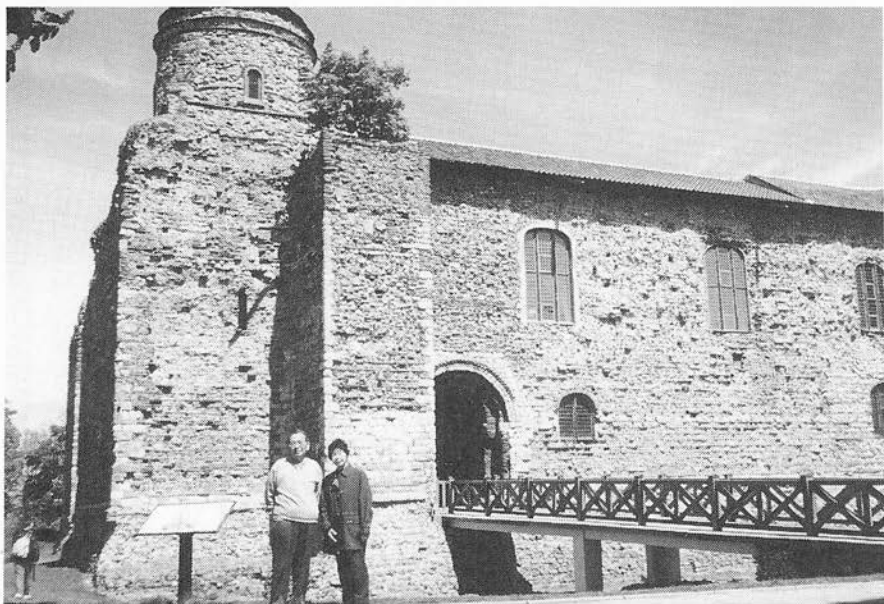
序にラウンダバウト (Round about、環状十字路、ロータリー) について触れておこう。日本ではあまり見られない独特のロータリーで、イギリスではこの形式の交

差点が多い。信号機がない場合が多く、ここを通過するには常に右側から来る車が優先で、ロータリーに入ると左からの車はすべて止まらねばならぬのがルール。イギリスは左側通行の国で日本人にとっては日本と同じ運転感覚なのでこの点は大助かりだが、このラウンダバウトには最初慣れるまでは悩まされるらしい。というのもロータリーが一つだけならまだしも、二つも三つも串だんごのように続いたり、幾つもの小さなロータリーの複合で大きなロータリーを形成するものまであつて、こうなるとドライバーはたまらない。進路を間違えて、とんでもない方向に出ることもしばしばで神経を使うという。見ていると結構スムーズに車が流れているようで、イギリス人にとっては自慢の交差点ということになるが、日本のように交通量が多く混雑するところではこの方式は向きのなかもしれない。

車の給油は原則としてセルフサービスで支払は勿論カード。

〈イギリスの選挙事情〉

私たちがヨーロッパに出かける頃は、家畜伝染病の口蹄疫 (Foot and mouth diseases) の流行で大騒ぎの様子が新聞、TV や娘からの電話で知らされていた。たまたま孫の R が学校の遠足でイギリスからベルギーに行った時など検問が厳重で一人一人消毒の処置がとられた



コルチェスター・キャッスルミュージアム

といはかなり神経を使っていたようであり、私たちを案内してくれた旅行社も旅行中の肉料理は一切断っていたほどだ。事実、イギリスに着いて楽しみの一つにしていた当地の有名な画家コンスタブルがこよなく愛しよく描いたという風景がそのまま娘の住まいの近くに残っているとのでその辺りを散策する積りだったが、口蹄疫の影響で付近の通行が禁じられ残念ながら果たし得なかった。

ちょうど、こんな騒ぎの中総選挙は六月はじめに延期され、滞在中は選挙戦の最中だったようだが口蹄疫は国の内外に対して早期に解決を要する問題だった。結果は早々と安全宣言が出たようで、私たちの見る限りでは、スーパーでも食肉製品は気にしている様子もなく売られていたし、食卓にも影響はないようだった。選挙後の新聞報道によれば、政府は口蹄疫の対応が後手に回った反省から、農漁業食糧省を解体して新たに環境・食糧・地方問題省を設け、農漁業への環境・衛生面の配慮を重視するとともに農業の振興に力を注ぐ構えを打ち出したという。これは口蹄疫がいかに大きな社会問題であり、国民の関心事だったかを示すものだ。

六月七日の選挙の結果は労働党の大勝に終わり、ブレア政権の続投となった。前回の総選挙でそれまで通算十八年間政権を担ってきた保守党に代り労働党政権が誕生してから四年になる。その間、失業率が過去四半世紀を通じて最低になる

など経済は順調に推移し、国民は好況をバックに財政の改善を図ったブレア政権の実績を評価したといえる。だが一方では、教育、医療、交通などの公共サービスの改善が進まぬことへの国民の不満が募っており、これを解消するため、今回の選挙では「社会的公正と経済繁栄の両立」を掲げ、教員や医師、看護婦らの増員を公約する戦術を展開したことが奏効し勝因につながったことも見逃せない。

選挙後のこれからの課題は前述の公約の実現と先送りを余儀なくされているEUにかかわるユーロ（単一通貨）への参加の問題であろう。今回の選挙では、労働党はこの問題が争点になることを極力避けてきたといわれる。世論調査で、労働党は国民の高支持を得ているが、ことユーロへの参加については約七〇%が反対していたからだ。ユーロは既に九九年一月に導入され、〇二年一月一日よりマルク、フランなど各国通貨は消え新たにユーロ貨幣が登場することになっている。まさに「Eデー」は本稿が皆さんのお手元に届く十一月一日の時点ではあと六十日はかりに迫っている。ただし、EU十五か国のうち、イギリス、デンマークおよびスウェーデンの三か国はまだユーロには参加していない実情なのだ。二期目を迎えたブレア政権にとり、今後対欧州姿勢をどのように明確にしていかが注目され、歴代首相がどちらかといえば米国か欧州の二者択一的だったのに対し、ブレア首相は米、欧

双方に柔軟だといわれる。ユーロ参加についてはイギリス経済への影響を考慮しながら首相の掲げる条件を満たせば、参加の是非を問う国民投票に持ち込む方針とも伝えられているが、その時期については定かでない。ともあれ、女王の肖像入りの大英帝国のポンドが姿を消す問題ともなれば大きな抵抗を生むことになるだろう。誇り高いイギリス国民はどのような選択をするだろうか。

（二〇〇一年）



父と夫を偲んで

木呂子 惠美子（春日町）

今年五月末に、九十七歳で父（河内太郎）が亡くなった。昨年まで立川で医者をしていたので、殆んど生涯現役といえるだろうか。

この父の春日部診療所勤務が、私と心の故郷丹波を今に繋げてくれた。二歳上の姉は、永く教師をして氷上町に住み、すっかり丹波の人になり、私は中学や高校の集りがあると、その義兄の所で世話になる。昭和十三年生まれの私は、昭和二十一年秋、インドネシアから京都に帰ってきていた父と、ハルピン（中国山東省）に実家のあった母が三人の子供を連れて引揚げて来て一緒になったその時から生活が始まったように、何かぎこちなさがずっとあった。

でも本来、子煩悩だったのだろう、四十年前の私の結婚の時も娘の幸わせを思い反対はしたが、結局は許して、愛情あふれる手紙を何通も送ってくれ、今も大切にしている。戦後生まれ（昭和二十二年）の妹は、生まれた時から父の懐で可愛がられた、最後までいっしょに住んで家族ぐるみで面倒を見てくれた。父の六人の子のうち五人はそれぞれ勝手に結婚

し、一番下の妹が医者と結婚、その義弟が診察に来てくれ、自宅で家族多勢に囲まれながら大往生を遂げた。

父は若い頃から絵描きになりたくて、京都で画塾に通ったりしたらしいが、祖父が職業軍人だったので三高、京大の医学部に行き軍医になった。戦地でもスケッチブックに、色々な絵を残している。五十六歳で立川で開業、約四十年間、地域の校医や幼稚園の子供たちの予防注射等もして、晩年の顔半分覆う白いひげを、さわりたがる子どもも沢山いたとか。



今年二月に亭主の十三回忌の法要をした。一九八九年三月二日が命日であるが、その十日位前、庭のまだ蕾の梅の枝を病室に持っていくと、暖かくてえんじ色の枝にトキ色の花がすぐ満開になり、「これは家の庭に咲いた梅あんず」（合の子だから咲くのが遅い）と看護婦さんに自慢していたが、本当に満開になったのは主な庭で一カ月後だった。

毎年この花の咲く頃は思い出す。口数の少ない人だったし、何冊も残っていた手帳や日記にも、天候、世界情勢、経済等々、びっしり書き込んであるが、感情を表したものが全然なく、がっかりしていたが、ずいぶん後に発見した、たった一言……

（二玄社渡辺社長のお世話による台北故宫博物院見学旅行）
一九八八年十一月十三日、惠美子台湾行、フライトNoや時間

の下に「きつとかえって来いよ」の言葉。私はあわてて見失わないよう赤線を引いた。

とにかく生きるのも不器用な人だった（割れ鍋に閉じ蓋で私も同様）、三井物産から関連会社、まるで企業戦士のように働きづめで、ようやく週三回位の閑職になり、旅行などもこれからという時だった。

兄である長男が学徒出陣でルソン沖で戦死、九十四歳の父を見送り、五年経たぬ内に逝ってしまった。私の好きな丹波の風景を見せたかった。高源寺、山に囲まれた稲田、八幡さんも、電車の沿線の両側に藤の花房が木から流れている風景等……、残念。

今は亡き上山頭さんが最後に出席された郷友会の時だ。前年奥様を亡くされた上山さんが「日常のなにげない会話の相手が居ないのが寂しい」としみじみ言われて、私も「本当にそうですね」と心からの返事をした。何年か前の霜の朝だった。車庫の黒い鉄の扉に、一枚の紅葉が張りついて、キラキラ光っていた。思わず「パパ、見て、見て」と言いたくて。悲しかった。一人言は癖になり、だんだん、ひどくなった。

ここ二、三年、持病プラス原因不明のめまいやふらつき、頭痛等で、頭もダメになり、ときどき人様に迷惑をかけ、郷友会のお手伝いも出来ぬ、この際、長い間色々とお世話になった郷友会の方々やお友達に、本当に有難うございましたと御

礼を申し上げたい。

外出出来ない日も、手入れが悪く、すぐ小ジャンゲルのようになる庭だけど、目の前に小鳥が水浴びに来たり、木蓮、海どう、雪柳、椿、あじさい、次々に咲き、なぐさめられる。

息子たちはシンガポールで三年になる。もう一年位居るらしい。この一人息子の連れ合いが、私が親だとしても、とてもこんなふうには育てられなかったらうと思われるような良い娘で、女の子が欲しかった私には誠に有難い。年に一、二度シンガポールに行き心身を休養させてもらう。

極東担当なので月の半分程は出張で飛び回っているが、日本にも二、三ヶ月に一度は来ている。私が香港に居た頃と同じ年代になったが、ずっと自然体で新しい人種、世界人という感じがする。

(二〇〇一年)



ソントンのピーナツバターは
柏原教会生まれ

柏原町上中町の丹波柏原教会（奥沢基芳牧師）で、戦前に同町内で稼動していたピーナツバター製造機が展示されている。機械は町内の信徒の家に保管されていたもので、同教会の「創立八十周年記念大会」に合わせて手入れされた。

ピーナツバターの製造が行われていたのは、アメリカ人宣教師、J・B・ソントン氏が旧藩校崇広館（現在は柏原総合庁舎）に開いた「日本自立聖書義塾（JAPAN SELF-BIBLE SCHOOL）」。

柏原で技術を学んだ信徒の一人が東京で会社を設立、現在は製菓・製パン材料のフラワーペースト業界最大のソントン食品工業（石川紳一郎社長、本社・東京都文京区）に成長している。展示を前に、社員が同教会を訪れてピーナツバター製造機を整備した。

ソントン氏は一九一九年来町、一九二二年に聖書義塾を開いて丹波一円にキリスト教を広めた。同塾では自立を重んじ、塾生らは午前中に聖書の熟読、午後はピーナツバターの製造、夜は自転車で布教活動を行ったという。ソントン氏は二六年に帰国したが、事業は信徒たちに引き継がれ、大戦前後まで続いたらしい。

（13・5・24日付）

人なつっこいウナギ
散髪屋さんが餌付け

柏原町北山の理容業、能勢浩三さん（53）宅で飼っているウナギがなつこ



ており、人の手からエサを食べる。芸当”で、お客さんの評判になっている。ウナギは、池でコイ二十匹と一緒に飼われており、底に沈めたビニールパイプを寝床にしている。エサの時間は一日三回。コイがバシャバシャとエサを食べ終わった頃、ウナギがゆらゆらと近寄ってくる。能勢さんがエサの乾燥エビを見せると、水面からするすると体を持ち上げ、パクリ。おなががいっぱいになると、再び寝床へ帰っていく。能勢さんがウナギを飼い始めたのは三、四年前。来た時は胴回り約八センチほどの大きさだったが、今では胴回り約十五センチ、長さ約七十七センチに成長している。

最初は釣竿の先にエサを刺して寝床の前まで運んでいたが、コイの様子を見て覚えたのか、いつのまにか自分から食べにくるようになったそう。だんだん芸に磨きがかかり、今では水面から約三十七センチの高さまで伸び上がる。

（13・5・27日付）



江戸時代中期の念仏の碑
(青垣町小倉)



佐治町内の速阪（至但馬）と神楽（至播磨）への分岐点（写真上）

分岐点手前のA邸（写真左）



丹波を撮る よう積もっとりますな一



柏原町母坪T邸の庭に降り積もった雪
とほうきで除雪された道路。ただし、
スリップにご注意



賀茂神社（市島町上竹田）の木々に
咲く雪の花



撮影
徳田八郎衛

◆足立美都子さん

母の介護のため柏原へ移り住んでおります。もう春日部に戻ることはないと思います。長い間ありがとうございます。

〒六六九一三三〇五 柏原町下小倉
五〇六 (平12・11・1)

◆足立良平さん

会費につきましては平成十一年分までお支払いしておりますので、平成十二年分十三年分を振り込ませていただきます。平成十三年七月には議員(参議院)を退きますので、関東水上郷友会は退会いたします。長い間ありがとうございます。(平12・11・7)

◆上野重喜さん

山ざるを楽しみに拝読しております。二〇〇〇年のつどい、芦田弘逸副知事(同級生)の講演を期待しています。(平12・10・28)

◆大野すず子さん

山ざるを頂く度に振り返る今日この頃です。紅葉の頃となり皆様お健やかにご活躍のこととお喜び申し上げます。(平12・10・30)

◆荻野修身さん

このたび案内状をいただきましたが、私八月に関西に転勤となり住所移転致しました。ご連絡まで。

〒六五九一〇〇九五 芦屋市東芦田
一一九一四〇三 (平12・11・5)

◆桂 照子さん

山ざるのお送りいただきましてありがとうございます。ゆっくり楽しみに読んでいただきました。夏の長い暑さから急に晩秋が訪れた不順な今年ですが、後わずかの今世紀を、かみしめて過したいと思います。(平12・11・4)

◆岸部正巳さん

五十一年ぶりに中学卒業の同級会が、

国領の助七において行なわれました。なつかしいのと、それぞれ年を取ったなあというのが実感でした。四十三名の出席があり、地元に住んでいる人は少なく、ほとんどが大阪、京都、神戸が多かった。来年もまた集まろうと誓いあい参会となりました。(平12・11・11)

◆北川安男さん

この度転居いたしました。永年勤めた会社を退職しました機会に、山梨県の山麓で田舎暮らしを始めました。自然の多い環境の中で、自然体で元気にしております。皆様の御健康をお祈りいたします。

〒四〇八一〇〇一八 北巨摩郡高根町村山西割三〇一〇一二 (平12・11・7)

◆岡村きぬゑさん

今年はどうとう柏原を訪ねることができなかつた。思い出す柏原高女の大

正時代の建物は健在かしら、建築物は手入れが行き届かないと朽ち果てるけれど、折り折りの手入れをすれば長命な由。何か良い方法はないものでしょうか。

(平12・10・30)

◆久保良雄さん

今年四月に海上保安庁を退職し、東海大学海洋研究所(在清水市)というところに勤務しております。

(平12・11・21)

◆佐藤公子さん

私も年を重ね、まだ一度も伺ったことがないので友達もおりません。また今回は主人が入院中のため行けません。が、一度位は出席したいと思っております。

(平12・11・1)

◆高桑良弥さん

私は九十四歳になり、腰が悪く動くのが意のごとくならず、お招きにも行かれませんが、皆様によりしくお伝え

ください。私の同窓生で今でもつきあっているのは荘正衛君(京都在住)だけになりました。

(平12・10・31)

◆高田美佐子さん

フランスへ旅行します。去る十月五日に柏原女学校の同窓会に行きました。

場所は喜作です。柏原町の町が、虫喰いのようなわびしい町になっていました。昔の町並がなつかしく思い出されました。

(平12・10・22)

◆谷垣 尚さん

相変わらず元気でやっています。例年この時季には丹波で募参で帰ります。このため(集いの会には)出席できませんが、会長様始め御一同様の御健勝と御多幸をお祈り申し上げます。

(平12・11・15)

◆谷川隆治・登子さん

ピラカンサや千両の実が赤く色づいて参りました。単身赴任も三年半を過

ぎ、大阪の生活にも慣れて参りました。出張で東京に帰って来ると、電車の混みかたのすごさを思い知らされます。とにかく元気でがんばっています。

(平12・11・2)

◆土田直吉さん

先輩の話によれば、余命はすべて神様におまかせすれば気が楽になると……。気力だけは負けないように暮せとか。一日一日をたいせつに老妻と郷里の昔話、同じ話しを何回となく、よくあきめせず暮せることを感謝しております。

(平12・11・2)

◆出町京子さん

丹波での舞踊講演が、お陰様で毎回好評で、森公苑ホールは定員オーバーの盛況。こんなに喜んでくださる観客の前で精一杯踊ることは、舞踊家冥利に尽きます。更に精進を重ね、日本の伝統芸能である日舞の普及に努力するつもりです。

(平12・11・1)

◆徳田八郎衛さん

最近では毎週か二週間に一度は帰省しています。葬式や法事が理由です。

(平12・11・10)

◆藤田 純さん

長島巨人も優勝して、経済も安定すると？いかに良いか……という思いにひたりながら投函させていただきました。

(平12・11・7)

◆平元富美子さん

今年はミレニアム。是非(集いの会へ)出かけたかと思っておりましたが残念です。大阪から帰りの七月末、千葉の千倉まで左眼白内障の手術に参りました。十月十七日に念願の子育て地藏尊建立の除幕式を致しました。其の後、人間ならば九十歳という犬が歩けなくなり、一生懸命介護した甲斐もなく、十一月九日永眠しました。また十一月三日には、保護司四十一年の主人の叙勲が発表され、法務省で八日伝達

式があり、勲五等瑞宝章をつけて宮中に参内しました。私は犬が重体で欠席

いたしました。娘が付き添いで行ってくれました。ただいまは、文化祭の花展や書道展の準備に追われております。

(平12・11・15)

◆松山 裕さん

水上出身の父(松山幸逸)が亡くなりましたとき、会員に入れていただきましたが、その後小生の都合により郷友会との交流が途絶えておりました。

申訳ありませんが、今年をもって退会させていただきます。(平12・11・10)

◆村上久夫さん

先般帰郷致し、故里の古刹を二、三巡って来ました。『山ざる』にはこの紀行をまとめて、お役目を果たしたいと思っております。(平12・11・4)

◆山岸幸子さん

僭越ながら一言申し上げます。(返

信葉書)宛名に、最初から御中と印刷

されるのはいかがなものでしょうか？事務局宛となっているのを差し出す側が宛を消して御中とするのが普通ではないかと思えます。間違っていたらごめんください。(平12・10・28)

◆山口孝子さん

冷気が日ごとに強まるころとなりました。今年も山ざるが届き、丹波を思い出しながら読ませていただきました。(平12・11・3)

◆山口敏之さん

いつも楽しみにしています。昨年勤続二十周年の一週間の休暇で丹波に帰りましたが、丹波は昔を変わらず良いところでした。寒くなりますが、ご自愛ください。(平12・11・6)

◆山田淑子さん(お嬢さんの代筆)

母はいま老人保護施設に入所し、毎日酸素吸入器のお世話になっています。

しかし呼吸以外のところは悪くないので、郷友の皆様にお会いしたいと申し出ております。また出席できることを楽しみにしつつ……。 (平12・11・6)

◆山中秀雄さん

山ざるとご丁寧なご案内ありがとうございます。会長の言。いつものことながら同感と感銘を受けるものです。所用にて欠席します。ご盛会をお祈りいたします。 (平12・11・1)

◆若森敏郎さん

おかげさまで元気に仕事をしております。地球温暖化防止のための省エネルギーが最近の緊急課題になり、私もこの面ではささか社会のお役に立つべくがんばっております。

(平12・10・27)

◆足立かをるさん

今年は殊の他の猛暑続きですが、お変わりなくお健やかに過ごして

喜び申し上げます。私も毎日元気で楽しく充実して、日々是好日に過しております。 (平13・8・16)

◆訃報

平成12年9月1日から13年9月25日まで事務所に届いたものです。慎んでご冥福をお祈り申し上げます。

大木 正徳殿 平成11年
小田八重子殿 同 11年10月

原稿大募集

本誌は会員皆様の寄稿によって作られております。どんな内容でも結構です。ふるってご寄稿ください。



- テーマ：①ふるさと随想
②近況エッセイ
③会員だより (短信)
④丹波を撮る (写真)

締切日：原稿はいつでも受け付けております。次号の最終締切りは平成14年8月20日です。

原稿枚数：400字詰4～5枚程度

送付先：〒104-0032 東京都中央区八丁堀1-8-2 ISビル2F (株)ホンゴ出版内

『山ざる』編集部
TEL 03-3537-6221
FAX 03-3537-6222

■ワープロで打たれた方は複写のフロッピーをお送りください。

安間喜代子殿	土肥多香子殿	地井佐和子殿	菅野さぬゑ殿	佐々木盛雄殿	坂本 重雄殿	近藤 哲夫殿	小寺 確郎殿	久下 重子殿	久下 梅次殿	柿原 嘉直殿
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
10年5月16日	12年8月	13年6月6日	12年9月24日	13年8月25日	13年4月29日	12年12月28日	12年8月1日	11年6月23日	12年6月23日	12年1月10日

松尾源三先生

(一九二〇〜一九八七)



水上西高 校長時代 (59歳)

弱きを助ける熱誠の士

一 柏原高校で三〇年

「体育教官室はどこでしょうか」柏原高校新入生の私は、二階の窓に群がる上級生の集団を見上げ、帽子を脱ぎ上体を四五度傾げる礼の後、恐る恐る尋ねた。「この坂下って行くと牢屋みたいな建物があるわな」カラーのホックを外したオッサンのような先輩が教えてくれる。運動場の方へ下って行くと、あった、あった。昔の牢屋を彷彿させ

徳田 八郎衛 (柏原町)

る格子窓付きのがっちりした建物が……一階は跳び箱等の体育教材置場、二階が体育教官室と汗臭い体育部各班の教室(当時の表現)らしい。

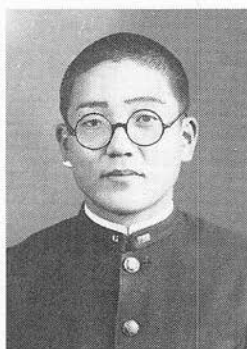
「源三先生、こんな牢屋に居るのかなあ」と同情しながら教官室へ入り、またまた四五度傾けた上体を起こすと幼時に聞いた懐かしい声が響いた。「よう来てくれたね。待ってよ」

松尾源三先生は、成松町(現水上市)

犬岡の生まれである。一九三七年(昭和十二年)、柏原中学校を卒業し、東京の日本体育専門学校(現在の日本体育大学)へ進まれた。聞くところによれば当時から逆立ち歩きが得意で年少者にも優しく、我が家も含めて親戚の子供たちには大人気だった。

日本にとって運命の年になる一九四一年春、同校を卒業した源三青年は、母校で体育教師としての第一歩を踏み出した。戦後に柏原高校で教えを受けた生徒の大半は「優しくて慈愛に満ちた松尾先生」と表現するが、張り切った青年教師当時は、かなり厳しかったらしい。「竹刀が前だけでなく後ろからも降ってきた」想い出を持つ人もいるが、本欄で紹介した山鳥鋭男先生や松山確郎先生もボカリとやられた時代だから無理もないと思う。

四三年暮に応召され、満州孫呉でソ連軍の怒涛のような進撃を台地の陣地



学生時代（日本体育専門
学校4年生）

で食い止めるうちに終戦を迎えた。三年もの悲惨なシベリア抑留から四八年九月に帰国されると新制柏原高校へ直ちに復職し、七二年春に尼崎の城内高校へ教頭として転出するまで三一年間、柏中・柏高で「ボンチャン」の名で知られる名物教師として勤務された。

豊岡の養護学校校長、次いで柏高青垣分校から独立した氷上西高校の初代校長として数々のご苦労の後、八一年春に退官された。その後も丹有地区教育事務所や丹有同和教育協議会で充実した日々を送られたが、八七年五月八日に不慮の事故で他界された。葬儀に

参列した友人が佐治川堤防から眺める
と、犬岡橋から松尾邸までの道路は会
葬者で埋め尽されていたという。

二、その生い立ち

上野重喜氏が別稿に記しておられる
とおり、松尾先生は弱いものには優し
かった。商業科も含めて就職クラスの
担任となるが多かったが、正月を
過ぎて就職先が決まらない生徒のた
めに奔走しておられた。私が三年生の
時も、クラス全員に日誌を提出させて
所見を書く「師弟通信」を始められた。
当初は形式的な日誌だったが、担任の
心意気に打たれ本心を記すようになって
たと告げる友人もいた。

また直情でもあった。一般に純情な
人は漱石の「坊ちゃん」に見られるよ
うに気性が激しい。だが松尾先生は決
してカッとならず気長に生徒を説得さ
れ、後に高校が荒れ始めた時も変わら
なかった。このような先生を育てた松

尾家の環境について記してみたい。

松尾先生は名前から想像される通り、
三男である。長兄は夭折し、次兄と姉
を柏中卒業前に喪つて惣領息子の役割
を担うことになる。若くして肉親と死
別した人は概して優しい。嚴父の源吾
氏も優しい人だった。源吾氏には私の
祖母を長女とする四人の姉があつたが、
姉が全員嫁いだ中学生の時に両親を相
次いで喪つた。進学の夢も吹き飛び、
柏原中学さえも退学し、たった一人で
松尾家を守るのである。

私が松尾先生の優しさに触れるのは
四三年暮、応召された先生を面会に訪
れた時だった。三宮駅からほど遠から
ぬ所で、どうやら公共施設を転用した
仮駐屯地だったようだ。「のらくろ」
によれば佩刀を許されるのは曹長から
上なのに、この軍曹殿はなぜ軍刀を吊っ
ているのだろうと甚だ失礼なことを考
えながら衛兵司令を眺めていると「よ

う来てくれたね」という優しい声が響いた。面会家族団の中心は源三先生の母堂であり、先生も早く話しかかったはずだが、付属物のようなチビに先ず声をかけて下さったのだ。

別れる時も「今度来て貰うまでに星が二つになつとかんと、兄ちゃん恥ずかしいなあ」と声をかけてもらったが、先生は間もなく原隊を追って大陸へ渡られ、再会の機会はなかった。

敗戦後、松尾家を悲運が見舞う。源三先生も四男史朗氏もシベリアへ抑留され、それも生死不明の一九四七年、農地解放の嵐の中で源吾氏は脳溢血のため急逝された。気丈な祖母は涙一つこぼさず実家へ駆けつけ、最後の旧制柏原中学生となつて二年目の五男幸蔵さんに「中学生の源吾は立派に喪主を務めた、お前も喪主をやれ」と励ました。その落胆ぶりは小学生の私にも判るほどだった。母堂しげのさんの髪は、間もなく真っ白になった。

翌年九月、ようやく復員できた源三先生を一足先に帰つておられた史朗氏が舞鶴まで出迎え、列車の中で父の計報を伝えようとするが胸が詰つて話せない。だが石生駅で待つ母に会うまでに伝えねばならない。列車は黒井駅の手前でトンネルに入る。そこで意を決して「兄ちゃん……」とデッキに誘い出し、ようやく計報を伝えられたのだ。

松尾先生はその翌年結婚され、二男一女に恵まれた。家庭では読書・書道と相撲・プロレスをこよなく愛する良き父親であり祖父であつたが、悲惨なシベリア抑留については余り話されなかつたという。保健体育の座学授業でも「ヒマワリの実もタンポポも食べたよ」と述べられたぐらいで数年前の地獄の体験は語られなかつた。

だが私の父は思いがけないことを知っていた。「源三君は信念を曲げないの、普通の抑留者以上に酷い目にあつたらしいよ」立つことも横になること

もできない檻のような地下牢に監禁され、転向を迫られたという。従兄といつても歳が二周以上違う父だつたが、抑留体験を共有する仲間として地獄の生活を打ち明けあつたのかな、と想像した。片や開戦と同時に英軍に、片や敗戦とともにソ連軍に、灼熱のインド砂漠と零下四〇度のシベリア凍土との違いはあれ期限不明のまま抑留され、そして日本人の団結維持に心を砕いた男同士であつた。

元々松尾家には、優しいだけでなく信念を曲げず筋を通すという家風があつた。特に源三先生の曾祖父のエピソードは有名である。犬岡は天領だつたので犬岡の庄屋は代官を兼ね、絶えず京都所司代の下へ報告に赴いた。曾祖父もその任に当つたが、篠山と園部との境にある天引峠で山賊を引つ捕らえて二条城へ連行した。山賊といつても地元不良によるゆすりだが、代官一行を襲うはずがないから、恐らくゆすられ

ている通行人を救ったのだろう。貰い下げに走る地元庄屋たちにはとんだ災難だ。「お互いの立場があるから、こんな公にしないで」と恨んだに違いない。だが見て見ぬふりのできないのが松尾家の性分だったという。

晩年の源三先生は円満な管理者となられ、筋を通して周囲の不正や偽善と対決したエピソードは聞かないが、若い時は曾祖父に似た行動もあつたようだ。多忙な校長時代なのに、松尾先生が編集者となって刊行された抑留仲間体験記「ミハイロ会文集」第一集がそれを如実に伝えてくれる。

三、銃口の前に身を挺して

松尾先生の抑留地はハバロフスク州のミハイロチエスノコフスカヤであるが、それを簡略した「ミハイロ会」が復員二十年を記念して結成され、さらに十年後にこの文集が発行された。郷土部隊の戦友会ならまだしも、全国か

らの部隊が集められた収容所の戦友会だから会員は全国に散らばっている。その仲間に想い出を書かせて編集する

のだから並大抵の苦勞ではないが、率先して同窓会等の世話に当る松尾先生のこと、「第一集は兵庫県の方で」と頼まれるや喜んで引受けられた。会長も役員もない戦友会だが、松尾先生と同じく指揮する立場にあつた方が序文を記し、松尾先生への謝辞と併せて勇敢な行動を讃えている。

すなわち「機関銃中隊の小隊長として清澄山（と名付けた台地）に陣取り、ソ連の戦闘爆撃機に自ら銃火を浴びせ敢闘された」「終戦後は臨時建設大隊の副官として大隊長を助け、孫呉から黒河を経てミハイロへ護送される最も厳しい条件の中で部隊指揮を執られ、時にソ連兵のマンドリン銃口の前に身を挺して日本人の生命を守り通したことも何度かあつた」とある。

そういう母堂が「源三は分別があ

るから先頭に立って闘ったりせんやろうと思てたら、一人で敵機を打ちまくつたそうです、当たりもせんに」と語られたことがあつた。ご本人は「それから怖いから壕の中へ隠れたい。でも高射砲もない部隊で、皆が『機関銃、頼む』と言えば庇つてやらん訳にいかんから」と応えられた。正に序文の描く通りだったのだ。

寄稿文の各所にも熱意に溢れ、そして優しい松尾見習士官の姿が描かれている。高校教師の時と同様、目立つ存在だったのだ。ソ連参戦の夏にもなつて未だ見習士官とは解せないが、満州で従軍された方々が「春になると現地応召者は二等兵だけでなく予備役将校も四十歳前後で、社会的地位は高いが号令のかけ方も忘れていた。若い見習士官の方を部隊長も当てにしていた」と述懐されるから、松尾先生などはその見本だったに違いない。

だから抑留生活が始まると、松尾先

生は先輩の尉官を差し置いて臨時編成の大隊副官に任じられている。戦後は米軍の編制が定着したため、今では副官といえば秘書としか思われないが、旧陸軍の大隊副官、連隊副官は人事・総務幕僚を兼ね人事考課も行う強大な権限を持っていた。それに選ばれたのは、教師としての社会経験と併せ松尾先生の誠実な人柄である。

詰め込まれた貨車が北へ走り出し皆が騒ぎだした時、自重を促す中隊長の訓示の後、松尾見習士官が「各人勝手な行動をとらず常に行動を共にして頑張ろうよ」と演説して士気を鼓舞したことも記されている。だが多くの手記

が讚えるのは、マンドリンのような自動小銃を「ロスケ」が突きつけ、腕時計や外套さえも奪った時、「副官殿」と叫べば必ず駆けつけ、取り返してくれる松尾副官の献身的な姿である。

これらの手記からも、他人のいやがる任務を率先して引受ける、不正は見逃さず、弱い者は徹底して護るという松尾先生の姿が浮かび上がる。やはりご先祖の血を引いておられたのだ。

松尾家の墓地は犬岡山東麓にある。このお盆には久しぶりにお参りした。「よう来てくれたね」という囁きがどこからともなく聞こえた。

永遠の青年だったポンちゃん

足立和巳（青垣町）

兵庫県立旧制柏原中学校（現柏原高校）一年入学の最初の全校朝会だった

と記憶するが、新進気鋭の、あたかも兄貴といった感じの先生を、当時の植

木孝之助校長から全校生徒に紹介されたのが、体操と剣道担当の松尾源三先生だった。

その時、校長先生からの紹介で、私は松尾先生が卒業された当時の日本体育専門学校（現在の日本体育大学）を初めて知り、松尾先生が剣道四段の有段者であることも知って、早速剣道部へ入部した。放課後剣道場では、面打ち等の基本練習をみっちりしごかれ、時には上級生の練習試合を見学させられたが、その時の松尾先生の「一本一本勝負」の掛け声が、「イッポンイッポン勝負」となって、「ポンポン勝負」と聞こえてしまうのだ。そんな所から「ポンちゃん」のあだ名が付くのに時間はいかからなかった。

私が松尾先生を知り、剣道部へ入部したのが縁で、私も日本剣道連盟の四段の免状を、平成二年四月（六一歳時）取得できたことを今も感謝し、お陰で健康なのである。



平行棒で逆立ち
(柏高教諭時代)

入学した年の昭和十六年十二月八日に、日本は一方的な真珠湾攻撃により大東亜戦争に突入し、第二次世界大戦はいよいよ拡大してしまうのだ。そのような時代背景から柔道・剣道は必修課目（正課）となり、好むと好まざるに関わらず、全生徒がやらねばならなくなった。

もう一人柔道と体操担当の伴野先生がおられたが、伴野先生の体操では、「しっかり腕を伸ばして」と言われながら、先生自身の腕は曲がったままで、つい生徒も先生の真似をして、伸びる手をわざと曲げて体操するので、先生

は一層声を大きくして「腕を伸ばす、伸ばす」となり、先生と生徒の腕伸ばしのいたちごっこになったものである。

伴野先生は動作もやや鈍い感じで、あだ名は「鈍刀さん」だった。「鈍刀さん」も柔道の有段者だったが、何段だったかは覚えていない。「ボンちゃん」と「鈍刀さん」はまったく対照的な体操の先生で、「鈍刀さん」には悪いが、床体操にしても器械体操にしても、松尾先生の指導は自らやってみせるやり方だったため、生徒は圧倒的に「ボンちゃん」員だった。今の時代だと、きっと柏原高校から器械体操や床体操のインターハイ優勝者が生まれていたかもしれないと思われる。

戦争が益々激しくなる中で、松尾先生だけが教師として残れる筈はなく、私が中学二年の終わり頃か三年の初め頃に招集されて出征されたのである。

我々も中学三年の一学期より、西宮の鐘ヶ淵化学へ学徒動員され、飛行機

の脚を旋盤やフライス盤を使って造らせられた。そのせいで旋盤やフライス盤の使い方も知っており、パイト（旋盤で鉄を削る鋼鉄の刃）研磨も覚えたものである。

恐らく誰も松尾先生が、終戦後無事帰還されるとは思わなかったと思う。先生が帰還された時は、私はすでに中学を卒業しており、その後松尾先生にお会いしたのは、中学時代の担任の先生方が皆「くなられ、担任はされなかったが、もっとも親しみのあった松尾先生を、還暦同期会だったと思うが、幹事がお呼びしてくれたのが、終戦後の最初の最後であった。

多分その時先生は、七十歳前後だったろうと思う。松尾先生は飲むほどに酔うほどに愉快になられ、その内余興に逆立ちをやろうと言われて、見事に暫くの間逆立ちをされただけでなく、逆立ちのまま両腕で歩かれたのだった。それはまったく年齢を感じさせない、

柏原中学へ着任された頃の松尾先生そのままだった。会場の割れんばかりの拍手が暫く鳴り止まなかったのは、逆立ちの技のみならず、先生の若さに対する賛美でもあった。

そんな素晴らしい先生が、その二、

青空のように突き抜けた明るさ

上野重喜（氷上町）

三年後だと思いが、自動車事故で逝かれてしまうとは、思いもよらぬことであつた。今でも着任された頃と、同期会の時の若さそのものの松尾ポンちゃん、臉に焼き付いて離れないのは、私一人ではあるまいと思う。

背筋をピンと伸ばした上半身は不動。ペダルを踏む足の位置も定め、颯爽たる松尾源三先生の自転車姿は印象深かつた。松尾先生は、現在の氷上町、旧成

松町から自転車で柏原高校に通勤されていた。私も成松からの通学生で、毎日約十キロほどの道のりを往復した日々が懐かしい。当時の生郷村の市辺から横田までの「十六丁」（一丁は約百九米）は、南北の直線道路で、当時すでに美しく舗装されており、おそらく郡

内一の道路であつたと思う。遠くは、今の青垣町、旧遠坂、神楽から二十キロ以上の距離を通学する山西区の仲間たちには忘れられない道である。エンヤコラと喘ぎながらオンポロ自転車をこぐかたわらを「オハヨウ」爽やかな

声とともに通り抜けて行かれる松尾先生に会うと身の引き締まる思いがしたものである。松尾先生は、柏原高校の山西区自転車通学生のお目付け役的存在でもあったのだ。

松尾先生といえば、いわずと知れた剣道の達人である。自転車の姿勢の正しさ、軽快な脚の回転も、剣道での鍛練からきたものに違いない。柏原高校六回卒の私は、昭和二十六年入学、二十九年の卒業である。戦後の学制改革による新制中学の二回生で、入学当時の三年生には、旧制柏原中学校からそのまま上がってきた人たちが多かった。旧制と新制とが混在しているこのころ、私ども「新中あがり」は、学力も劣るとよく叱られたものだ。松尾先生には、私自身は体育の教科を三年のときに受け持って頂いただけである。

私たちの学年の教科を担当して下さった恩師の一人が、今、柏稜同窓会長をなさっている植田憲雄先生で、この植田先生が松尾先生の柏中時代の教え子だから、松尾先生は、私たちにとって「師の師」という別格的存在でもあった。しかし同じ町からの「自転車通学」でもあり、なによりも、当時の

柏高では、すでに長老格の先生として「ポンチャン」の名は全校に鳴り響いていたから馴染は深かった。体育の時のキビキビした体の動きと剣道の気合で鍛えられた張りのある声は、今も鮮明に記憶に残っている。

楠の大樹のある運動場に響いた「イチ、ニツ、サン、シツ……」の徒手体操の号令は、まことに爽やかで、小気味よく、受験勉強の憂さなどふっと飛んだものである。無駄がなく、メリハリに富む授業運びが特色だった。

松尾先生は、柏中三六回の卒業（昭和十二年）、そして今の日本体育大学を卒業後、昭和十六年に柏原中学の先生になられた。その十二月には太平洋戦争が始まった。松尾先生は応召され、敗戦とともにソ連に抑留され、極寒のシベリアの原野で伐採や運搬の強制労働につかれた。当時すでに尉官であった先生は、軍の責任者の一人として、当初、過酷な地下牢生活を強いられた。

多くの人たちが牢中自殺したり、精神異常をきたしたという。

シベリアの日々は実に悲惨なもので、「シベリアで苦しみのどん底を知った。人生のどんな苦しみもあれ以上はないだろう」と、ご子息の源次郎氏に言葉少なに述べられたことがあるという。

松尾先生はシベリアで地獄を見られた。その体験は余りにも残酷で、先生は生涯あまり語られることがなかった。先生が帰国されたのは、終戦から三年後、昭和二十三年である。同じ年、ご令弟の史朗氏（現芦田姓）もシベリア抑留から先に帰国されていた。ご兄弟二人が、戦争のため、互いに会うこともなく、同じシベリア生活を送られての帰還であった。

先生の出征、抑留中に、ご尊父、ご令姉が先立たれていた。悲嘆の底にありながら、先生は一家の長として、残る家族兄弟の父親役も果さなければならなかった。

いつも明るく爽やかな松尾先生には、日本国の敗戦の悲運とともに想像を絶するすさまじくも深い人生体験がおありだった。今は忘れている人も多いが、戦後、アメリカの占領下、剣道が禁止されていた時代がある。日本人の死を怖れぬヤマトダマシイ、武士道精神を警戒したアメリカの占領政策で、武道が学校教育では禁止され、特に「剣」はいけなかった。映画でも、チャンバラ時代劇が禁止され、たとえば片岡千恵蔵といった大スターが、チョンマゲをやめてソフト帽をかぶり、多羅尾伴内シリーズなど、探偵ものを演じていた頃がある。「七つの顔」「十三の眼」「二十一の指紋」……といった映画を懐かしく思い出される向きもあるう。

刀と鬚を奪われた武士は、牙を奪われた狼、陸に上がった魚同様、サマにならない。戦後の柏原高校に復職し、剣道の禁止を知った先生は、どんなにか情けなかったことであろう。敗戦の

屈辱と悲哀を改めて実感されたに違いない。

その後、ちょうど私が高校二年（昭和二十七年）の頃、「しない競技」が許可され、松尾先生は逸早くこれに着目、愛好会をつくり、放課後希望者に教えて下さった。三日坊主ながら、私もこれに参加して、しないの持ち方、足の運びの基本を教わった。しない競技は剣道にはほど遠く、しないも剣道の竹刀よりずっと柔らかく、防具も簡単、白い運動着の上に取り付けるだけであった。それでも松尾先生の張り切りようと熱意は、末端の私などにもピンピン伝わってきたものだ。

やがて本来の剣道も認められ、松尾先生が本格的な指導を始められた。高校九回卒の広瀬勝一氏は、柏高剣道部草創期の松尾先生の愛弟子で、在校中に二段、県大会でも常に上位を占める名選手であり、後に柏高教員として松尾先生とともに剣道部を鍛え上げた人

である。柏高剣道部は、県大会で個人優勝をはじめ団体準優勝、三位などその勇名を轟かせたが、これは偏に松尾先生の指導の賜物であろう。

松尾先生の柏原中学時代からの親友村上彰氏は長く郡内の教育界に尽くされ、高校から教育長も歴任された。松尾先生は、その縁もあり、定年退職後は郡教委で教員の指導相談に当たり、また社会福祉関係の仕事にも貢献するなど生来の奉仕精神で生涯を貫かれた。村上氏によると、先生は世話好きで責任感旺盛、同窓会の世話など率先して引き受けられたという。私の在校中も、卒業予定者のための就職先探しに奔走しておられたことも思い出す。

松尾先生は謹厳な反面、気さくで軽（ひょうきん）などころがあった。ある年、予餞会か何かで黒田節を踊るため、日本舞踊の得意な女子生徒に頼んで、懸命に習って披露されたという。剣道で鍛えた身の捌きが踊りに加わり、

先生ならではの味わいがあり、槍姿が決まっていたという。その時、踊の師匠を務めたのが、今、関東郷友会でも馴染みの上高子さんである。

浅黒く四角い顔、眼鏡の奥のやさしいまなざし、しかし、ひとたび剣を持つてば、面を隔てて眼光鋭く相手を圧倒したという。先生は、しかし、厳しさ以上に慈愛に満ちた人であった。困っている人、弱い人には、どこまでもやさしく親切であった。そうした慈悲の心、そして、なにかふっ切れたような、突き抜けたような先生の明るさは、シベリアでの辛苦を極めたどん底体験からきたものか、あるいは剣道の修行によるものか、大悟徹底、禅の悟りに通じるものであろう。

「継続は力なり」が先生のモットーであった。教育者としての先生の意思は、ご子息に受け継がれ、松尾家の当主源次郎氏は、郷里にあって氷上高校の教壇でご活躍である。

■会員が書いた本

徳田八郎衛・著
「間に合わなかつた兵器」

光人社F.N文庫

火縄銃が四百年前の戦乱の世を治めたことは、世に良く知られている史実である。新しい兵器をいち早く導入しどの様に使用したかが、勝ち組と負け組に別れた事を顕著に示している。近代の戦争においても同様のことが言えて、勝ち組になるため盾と矛の関係である兵器の開発・改良と素早い配備が未来永劫に続くことになる。

本書は、先の大戦で日本が技術戦争でも負け組になったことを、元自衛官（京大大学院卒、防衛庁防衛研究所や技術研究本部の研究員、防大教授などを歴任）の軍事技術専門家が技術的な面から分析し著述したものである。内容においてただ単なる技術面からの記載でなく、各国及び旧軍が直面した戦域の局面を例に挙

げ部隊の運用面からの内容も豊富に記述して、技術・運用の両面を同時に理解できるもので、読むものを飽きさせないように工夫・配慮された軍事歴史書である。

著者が一番強調したかったことは、「当時の大日本帝国陸・海軍の技術は世界一であった。負けたのは、生産力、兵器の量であつて質的には劣つていなかった。」と信じているのは間違ひであると言ふことである。この様に言えるのも戦後半世紀以上が経つたからで、旧軍技術者が健在であつた頃は一種のタブーとして語られたのは少なく、華々しい戦果と日本独自で開発した技術の苦勞話に限られていた。その点本書は史実を第三者的に捕らえて、歴史に忠実な技術戦史と判断できる著書であり後世に残したいものの一つである。

本書のベースは、オペレーション・リサーチは為されても採用されなかつたものがあつて戦線に配備されず、また配備されても低品質のため前線の将兵に皺寄せが行つたことなどを

記載し、その原因を究明している。結果的に負け組になつたことについて、兵器と言ふものは総合技術産業の結集の産物であり、国力と絡まつてマネージメントし開発・配備されるもので、日本の自動車産業の遅れが戦車の開発導入に影響を与えたこと、ソ連が国力を挙げて開発・量産体制に入り「間に合つた兵器」として配備したこと及びドイツの「間に合わなかつた兵器」を比較の対象として紹介している。特に著者の専門であるレーダなどの情報収集兵器の遅れについて相当の紙面を割いて詳細に記述してある。その如実に書かれた内容は一読に値するので、本紙面では特に内容は紹介せずにおきたい。

本書は、八年前に東洋経済新報社から上梓されたが、これが絶版となるのを惜しんだ光人社がこのたび内容を一新した文庫本として出版されたものである。価格も手ごろになり入手しやすくなつてゐる。（増井）

■郷里について書かれた本

山岡光治・著

『訪ねてみたい地図測量史跡』

古今書院・刊

著者の山岡さんは北海道立美唄工業高校を卒業して直ちに建設省国土地理院に入所し、三十年にわたって地図作成に携わってきた測量のエキスパートである。その実務家がこのような題名の本を、地理や測量の専門出版社、古今書院から上梓されたのは快挙というほかはない。

この種の本は地理学や地形学の専門家の手で多数出版されてきたし、「伊能忠敬ブーム」もあってさらに増えそうである。だが地図作成の実務経験と、国土地理院職員ならではの貴重な情報を駆使した本書は一味違ったものとなっている。たとえば、全国の一等三角点標石の材質や刻みはまちまちだそう。千葉県房大山などは粗悪な石が使われているだけでなく、十字に代わって○印が刻ま

れているとか、長野県陣馬平山の刻印はXだとか、読者は地理や地学の教科書が伝える建前論とは違った実情を知ることになる。

本書は時系列的な記述は避け、「北海道・東北編」を筆頭に地理的な分類で史跡が紹介されていくが、幕末から明治時代に至る先駆者たちの業績に精通する著者は、各所で百年や二百年の昔へ読者を誘う。近代日本の技術史や人物史に興味を持つ人も楽しめる本である。

「元祖・温泉記号の碑（群馬県安中市磯部）」や「初代陸地測量部長小菅智淵の墓（東京都青山墓地）」のような地図測量史跡を欠く水上郡であるが、幸いにも「中央分水界“水分れ”（兵庫県水上郡氷上町石生）」が収録されており、しかも水分れ（みわかれ）と正しい振り仮名さえ記してあるのはうれしい。

そして著者は、水分れ公園や記念館などには一語も触れず、「高谷川そのものが分水界」「国道175号線と176線の接点が水分れ」「よほ

ど注意しないと通り越してしまいうな小さいな水分れ橋」と、限られた紙面を分水状況の記述に当てた。本誌29号で紹介した「誰でも行ける意外な水源・不思議な分水」の著者、堀淳一さんに劣らぬ分水地形へのこだわりである。

ほかにも「世界一狭い土淵海峡（香川県土庄町）」「日本最高所水準点（岐阜県野麦峠）」といった地形特異点は幾つか列挙されているが、小さくても碑は重要である。「○○出生の地」「伊能忠敬宿泊跡地（あるいは測量遺跡）」とキチンと碑を建てた土地は漏れなく列挙されている。水上町においても、小さくていいから「脊梁山脈最低所の碑」を石生宿畑のお堂付近に早く建てて頂きたいものである。

(徳田)

近代女性文化史研究会・著
『戦争と女性雑誌』

一九三一年～一九四五年

ドメス出版・刊

ちょうど百年前の一九〇一年に開校した日本女子大学校に草深い丹波から第一期生として学び、請われて家政学部の教授に就任した後、三一年から四六年までの一五年間校長を務めた井上秀を知らぬ丹波人はいない。そう信じていたが、評者の同期生でさえ秀さんを知らないことが判明する。春日町山田に生家が残っているうちに知らしめねば、と思っていたところへ戦時中に彼女が果たした役割を詳しく述べた本書が刊行された。それも戦争に協力したとして否定的に描かれている。

雑誌の研究なのに秀さんが何故描かれたかという点、同校が一九〇四年六月二五日の第一号以来、毎週ために発行してきた同窓会「桜楓会」の機関紙「家庭週報」が、勤労奉仕・勤労働員の実態や教育者の指導方針

を伝える絶好の資料として分析され、これだけで一つの章となったからである。

「主婦の友」や「婦人クラブ」も重要な戦時下の語り部であるが、女子教育と勤労奉仕・勤労働員に関しては「家庭週報」に勝る資料はない。同誌は桜楓会機関紙であるとともに卒業生の生涯学習の場であり、卒業生を通じて婦人全般の啓蒙も目指していたからなおさらである。一九三八年の募集人員が津田英語塾一一六名、東京女子大一五五名、東京女高師一三〇名なのに同校は四一〇名と大規模の学園だったので、調査対象としても最適であった。

井上校長が力を入れたのは西生田校地での食糧増産と周辺農村での農繁期共同炊事・栄養指導・乳幼児保育であり、臨時託児所閉鎖の後も研究成果を社会事業や農村託児所へ応用指導するよう求められた。川崎市役所からは一般保母の指導まで依頼されている。生田校地の水田七段歩での田植には校長や家政学部長も参

加したらしい。四三年夏には四年生が満州の開拓団へ派遣され、衣食住と育児全般にわたる指導と援助を行った。他の女子大に見られない奉仕であり、教育成果を社会に還元するという同校独自の姿勢を実証したと執筆者も高く評価している。

評者一家は開戦前に海外から引揚げて柏原町母坪へ一時帰郷していたが、母は部落公会堂に農繁期臨時託児所を開設した。地域の要請に加え、「週報」による卒業生への呼びかけも一因だったようだ。

少年団や青年団を統一した大日本青少年団副団長（団長は文相）に就任したこともあって戦後、公職追放者に指定されるや「無念だが一人位は女性の戦争責任者はでてほしい」と「週報」に潔く述べた秀さんは、戦中も戦後も上手く立ち回った学者・文化人が多い中で実に気骨ある丹波人だったといえよう。

（徳田）

展覧会

●青垣2001年展

今年で14回を迎える。この展覧会も所用のため見ることが出来なかった。息子に頼み買い求めた図録を見ると、例年の水準と同じように感じた。

図録は図録であって、やはり会場に足を運ばなければ作品を観たことには



大賞・文部大臣奨励賞受賞作品
「騒亡の刻」黒住 拓



佳作賞「ひとつ」池原武志

ならないが、黒住拓氏の「騒亡の刻」(大賞)、多賀竜一氏の「Sketch」(優秀賞)、池原武志氏の「ひとつ」(佳作賞)。中でも「Sketch」と「ひとつ」は何かものたりないものを感じながら、ひかれるものがあった。「ひとつ」のようにやはり男女が抱擁した構成で「ひとり」と題して麻生三郎氏が昭和20年代に描かれた作品があるが孤独の表現は主観そのもの、濃密な心のリアリズムに感動したことを思い出す。

今年は2001年なので記念して今までの審査員の方の作品を陳列する特

別展と一般展を二期に分けて青垣町で開催。東京展は一般の出品者展のみ、平成13年11月26日～12月1日左記と同所で開催される。(平成12年11月27日～12月2日、銀座、洋協アートホール)

●可部美智子陶展

「喜びと感謝」をテーマに「昨今の荒んだ世相にあって住んでいた「子供の世界」を作ること、生きる」ことの活力源になれば……と案内状にあるように「おるすばん」はほほえましく顔の表情などに重点をおいて他は単純に処理した「慈しみ」、陶額の「冬の旅」フォルムの面白さ。力作「風に立つボク」はりりしい少年の姿が表現され、織部長方皿の力強さ、灰釉鉄絵深鉢や長方皿等の滋味のある絵づけ、そして灰流焼メ皿は落ち着いた色彩だが感覚が新しい。殆ど売約という盛会であった。(平成12年8月30日～9月5日、小田急新宿店工芸サロン)

◆陶彫展にも出品 今回の陶彫展は会場をギャラリー・クボタに移しての第48回展。例年より全体にレベルの高い作品がそろったように感じる。風に向かい手をにぎりしめてあどけない「風に立つボク」をはじめ、小品で「花かけ」「万葉の春」「G線上のアリア」そして中国の鍵の取手からヒントを得て制作した「盤」。

「その鍵の取手は小さいけれど非常に迫力があり、それが根っこになって制作した」とのこと。中々精巧でめずらしい作となった。



可部美智子「風に立つボク」



久保良雄氏「みかん山」(F15号)

今回は今年の10月11日～16日、広島福屋「ギャラリー・〇一」で個展の予定。(平成13年6月11日～17日、京橋、ギャラリー・クボタ)

●久保良雄氏合同作品展に出品

運輸省、海上保安庁、日本空港ビルディング各絵画クラブの研究グループ展である。今回は残念ながら所用で見

ることが出来なかった。申し訳ないが久保氏にお願いして、製作意図と出品作「みかん山」(F15号)の写真を送っていた。[絵は清水市の私の住所近くのみかん山で昨年春に花が咲いている頃初めて見て非常に気に入って、早く描こうと思いつきながら秋になってようやく描いたものですが、最初の感動はもはやなくなっていました。今回は習作のつもりで描きました]同封の写真を見る限り葉の一枚一枚の動き、草の描き方に作者の息づかいが伝わってくる南面的な面白さを感じた。

(平成12年11月20日～26日、京橋、ギャラリー・クボタ)

◎篠原教室つつじ会展

篠原よね子氏主宰第14回フランス刺繍作品展。今年「かきつばたと水蓮」を出品。作品の右上の左下にかきつばたを、その間を奥行きのある水面に水蓮が浮かぶ。暗緑色の縦の線が強い

きつばたと、やわらかく明るい細い横線の水面と水蓮の対比。大胆な構成が面白い。

今回は篠原さんの都合であとで修正の出来ない原画は篠原氏が描き、代りに松本政子氏が刺した作品となった。会場いっぱい、ばら、つばき、菊、ゆり、ひまわり、鉄仙等々華やかな作品が陳び、それに風景、中にはビルの一角など建築をとり入れた新しい作品が変化をつける。額装が中心だが作品



作品と共に篠原よね子さん

を軸装にしたものや、椅子の背もたれや、小物入れの引出しの正面にはめこんだもの、その他袋物や電気スタンドの笠など斬新な作品も目立つ。いつもながら熱気あふれる会場だった。

(平成12年9月29日〜10月3日、銀座、かねまつホール)

◎荻野美穂子展

具象から抽象に転じて3回目の個展。前回は自然現象からヒントを得ていた



荻野美穂子さん

が、今回は2年程前から茶道をはじめ、古陶や古布の肌あい、わびさび、俳諧に用いる歳時記等から発想を得ている。水彩絵具を主軸にアクリル、クレヨン、色鉛筆を併用して、赤、グリーン、ブルー等の色を下に塗りこめ、又その上に色を重ねてゆく。中にはサンドペーパーでとぎ出して下の色を生かすこともあり、制作の途中で気に入れば、そこで筆をおく。全作品画用紙に描いているが紙にしみこむ味にひかれ、紙を使うと反発を感じないという。すべての作品に「ITYRM」「RNT」等の題名がついているが、子音をつける^てと凍ゆるむ、凜と、という具合。日本語で具体的に題をつけると、見る人に限定を与えてしまうから避けたとのこと。50号以下4号まで30余点の出品だったが40号の「RNT」(凜と)は暗紫色の複雑な色層を作って、それを丁寧に拭きとり現れた黒の弓型の連続模様を表現している。その繰り返しは強弱のあるリズムを生み出し深くて静かな

作者の心の響きが伝わってくる。工芸的な味に支えられるのではなくより純粹に造形作品であり今回の収穫だろう。明年11月には銀座、アトリエTKで個展の予定。今後の制作に興味がある。(平成13年6月22日〜30日、銀座、空想・ガレリア)

○お詫びとお願い

今回、二つの展覧会を見のがし、折角御案内をいただきながら申訳なく思っています。

来年東京での個展など三年間程は多忙になり、大変勝手ながら、次号からは展覧会名、会期、開催画廊のみ御紹介したいと思います。案内状に作品写真がない場合は写真も送ってくださいば幸いです。又、会期や会場が決定している場合、予告でも結構です。御了承下さいますようお願い致します。

(以上・常岡)

同窓会

植田会長迎え柏陵同窓会

平成十三年度の東京支部総会は、六月十六日(日)九段会館にて催されました。会の運営、セミナーの準備などいっさいを、高校七回、八回卒業生有志にお願ひしましたが、事前より何回かの会合を開いて熱心に準備をすすめ



ていただき、ひさしぶりに九十名近い会員の参加を見る会となりました。

柏陵セミナーは、永年NHK、JICAで活躍され、現在も「ラジオ深夜便」等で活躍されている上野重喜氏にお願いし、「インドネシア・トルコ・日本」のお話を聞きました。

平成十四年度の運営は、高校八回生と九回生の担当となっていますので、よろしくお願ひします。

なお、本年春の受勲で同窓会長植田憲雄氏と上福岡市在住、旧中44回生の前田和秀氏が勲四等を受賞されました。植田氏は教育、前田氏は医学の分野での功績が顕彰されたものです。おめでとうございます。

また、東京支部事務局が移転しました。新所在地は左記の通りです。

〒一三四一〇〇八四 江戸川区東葛西六〇一―一七 第六カネ長ビル五〇一
株式会社サイモン・デジタル・センター内。事務局長は藤田徹さん(高校17回生)にお願ひしました。(坂上)

猿

友

会

井田悦子
喜田綾子
長尾貴美代

大石佐代子
小糸イキ
安原三智子

小田明子
笹倉郁子
塩見みつえ

可部美智子
篠原よね子
渡邊貴美子

岸本昌子
千葉淳子



株式会社 **三葉水道**

代表取締役 **橋爪 忠**

(氷上町黒田出身)

〒276-0034 千葉県八千代市八千代台西7-5-29

電話 0474-84-7121 FAX 0474-82-9626

エクステリア専門商社

株式会社 **トコナメエプコス**

代表取締役 **松下文雄** (柏原町)

常務取締役 **広瀬寿和** (山南町)

〒166-0003 東京都新宿区本塩町23 第2田中ビル

TEL 03-3354-0211 FAX 03-3354-7767

調布市文化会館たづくり内
アカデミー愛とぴあ
文芸誌「たきおん」同人

木 村 つ た 江

〒182-0005 東京都調布市東つつじヶ丘2-39-5
電話 03-3300-6895

水・電気・熱などエネルギー全般の御相談に応じます。

電気主任技術者第一種免状	第2-319号
技術士（電気部門）登録証	第15810号
エネルギー管理士（電気）免状	第2857号
エネルギー管理士（熱）免状	第5191号

若 森 技 術 士 事 務 所

所 長 若 森 敏 郎

〒302-0023 茨城県取手市白山5-4-13
TEL・FAX 0297-72-0907

◆本誌発行にご協力有難うございました

1924年創刊 週2回(日・木)発行
1ヵ月1,220円(郵送料200円)

全国各地、海外で活躍する丹波出身者の近況を
紹介する **丹波人NOW** が好評です。



丹波新聞社

〒669-3309 兵庫県氷上郡柏原町柏原201

Tel 0795(72)0530 Fax 0795(72)1956

▶ホームページをご覧ください。

<http://www.tanba.co.jp>



代表取締役社長 小田 晋作

関東とふるさとをつなぐ「グローバル」な紙面

東・名・阪で事業展開中
丹波出身の人材・来たれ!!
東京から丹波路への物流を目指して

三協運輸株式会社

取締役社長 岸 本 勲

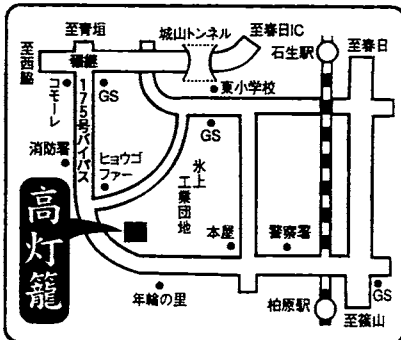
(氷上町出身)

本 社 〒121-0064 東京都足立区保木間1-1-3
TEL 03 (3860) 8112 FAX 03 (3860) 1631
大 阪 支 店 〒578-0911 大阪府東大阪市中新開2-5-26-201
TEL 0729 (64) 6499 FAX 0729 (64) 6517
名古屋事業所 〒457-0837 愛知県名古屋市南区加福町3-5
TEL 052 (691) 8574 FAX 052 (612) 2032
埼 玉 支 店 〒363-0008 埼玉県桶川市大字加納字379-1
TEL 048 (728) 9380 FAX 048 (728) 9381
倉 庫 東京・大阪・名古屋・埼玉・兵庫・北海道

日本の真ん中から出た
柏原天然温泉

たかとうろう
高灯笼

TEL **0795-73-1126**



高松自動車道春日ICより城山トンネルを経て信号(縦線)左折、約1km

入浴料：大人550円（中学生以上）

子供250円（小学生）

幼児100円

営業時間：朝9時～深夜1時

深夜3時（土）

定休日：毎月第3木曜日

ビル・マンションの総合管理

株式会社 **長友**

取締役社長 谷口浩章

(永上町出身)

本社 〒101-0041 東京都千代田区神田須田町2-6

TEL 03 (3257) 9611 FAX 03 (3257) 9619

E-mail h.taniguchi@mx4.ttcn.ne.jp

大阪支店 〒541-0048 大阪市中央区瓦町3-5-7

TEL 06 (6222) 5076 FAX 06 (6222) 5025

東京都ユニバーサルホッケー協会副会長
府中市教育委員会認定市民スポーツ指導員
東京都渋谷区日中友好協会理事
E M ネット 埼京理事

足立和巳

〒183-0051

東京都府中市栄町一丁目五二二七
TEL・FAX 〇四二二三六四一七二二七

足立かをる

足立勲平

〒251-0031

藤沢市鶴沼藤ヶ谷一丁目七四
電話 〇四六六一二二一六四六一

ミワ電気工事株式会社

代表取締役 足立謙悟

〒235-0033

横浜市磯子区杉田五二二一九
電話 〇四五七七二二二六一
FAX 〇四五七七二二二六四

株式会社 ナレッジリンク
足立国際会計事務所

代表取締役
税理士・米国公認会計士 (Certificata)

足立知佳子

〒152-0035

東京都目黒区自由が丘一丁目三四 藤タワビル六〇二
TEL 〇三三七一八一八〇四七 FAX 〇三三七一八一八二四七
E-mail: cadaochi@ata.gr.jp

足立静雄

株式会社 トレンタ

足立真一

〒211-0005

川崎市中原区新丸子町七〇一
電話〇四四-七三二-六三七一
自宅電話〇四四-八五四-六三四〇

足立誠一

〒248-0031

鎌倉市鎌倉山四一八-二五
電話〇四六七-三一-三六〇〇

日本損害保険協会特級(二般)資格 第特一三五八六号
飯田 保険事務所

飯田光雄

〒285-0045

千葉県佐倉市白銀四一十四-五
電話〇四三-四八五-〇五〇三
FAX 〇四三-四八五-〇二九一

明治四年創業・伝統銘茶
株式会社 明日香園

代表取締役

池畑 豪士郎

本社 東京都豊島区南池袋二-二六-五
電話 〇三-三九八〇-四七三二
直販店 西武百貨店池袋本店B1
電話 〇三-五九五二-五〇七六(直通)

生田清弘

東京都世田谷区成城一-七-七
電話 〇三-三四二五-一八九三

井本義一

有限会社 PCC大洋

岡 吉 明

〒351-0014

朝霞市膝折町三―七―五
TEL 〇四八―四六〇―一六〇一
FAX 〇四八―四六〇―一三三九七

萩 野 武

小 田 富士夫

梶 原 やす 清

株式会社 アイ・ケイ・アイ

代表取締役 岸 田 勇

〒103-0013

東京都中央区日本橋人形町三―七―一〇
電話 〇三一―三二四九―五二六一

木 呂 子 恵美子

〒204-0012

東京都清瀬市中清戸二―七五〇―一八
電話 〇四二四―九一一―三〇三三

坂
上
明

栗
田
功

久
保
春
雄

〒300-0031
土浦市東崎町十三十二一六〇四
電話〇二九八一二二一二九七八

合唱指揮者

笹
倉
強

〒352-0014
新座市栄四一五一二一五
TEL・FAX〇四八一二七七一二五六四〇

坂
上
豊

坂
上
勝
朗

高見嘉都司

〒173-0025 東京都板橋区熊野町四〇番十一号
電話 〇三―三九五六―〇六〇〇

(株)フジサンケイリビングサービス
セントラル・インペックス(株) 専務取締役
代表取締役

高見秀史

会社TEL 〇三―五三三三―〇〇〇―
自宅TEL 〇四七―四三九―一六九―

千種倫幸

(株)サイモン・デジタル・センター

専務取締役 塚口智

東京都江戸川区東葛西六―一―十七
電話 〇三―五六五九―三〇八一

常岡幹彦

鶴田宏

田 英 夫

瑞豊産業株式会社
代表取締役
社長
水 船 隆 昌
〒102-0076 東京都千代田区五番町六
グレイス五番町ビル7F
電話 ○三三三二二二一七三五

日本舞踊
西 崎 祥
端 唄
根 岸 妙

〒224-0027
横浜市都筑区大圃町五〇〇一八
電話 ○四五-五九一-六六五五

東京都行政書士会理事・東京都行政書士会八王子支部理事
小口・宮野合同事務所 所長
行政書士
宮 野 近

事務所 〒192-0063 八王子市元横山町二一八-三宮野ビル
電話・FAX ○四二六-二八一-三三五三
自宅 〒192-0911 八王子市打越町一-二二三-三
電話 ○四二六-三五一-四三八五

青葉山 真照寺
八王子 青葉霊苑
(都営八王子霊園隣り
第二期墓地分譲案内中)
住 職
堀 井 隆 川

〒193-0826
東京都八王子市元八王子町三一三三九七
電話 ○四二六-六三一八四〇三

村 上 久 夫

〒168-0072
東京都杉並区高井戸東三一四-十二
電話 ○三三三三三二一七-一三四

◆本誌発行にご協力有難うございました

渡邊隆男

代表
吉住自由造

〒216-0033
川崎市宮前区宮崎五-五-三五
電話〇四四-八六六一三六二一

山口和久

〒196-0031
東京都昭島市福島町二-一〇-二七
電話〇四二-五四四-八八六一

惠理子
藤吉郎秀吉
寧々・愛々・茶々

さすが
&
されど

60歳からの知恵と体験交流誌

隔月刊誌 [さすが & されど] 好評発売中

本誌は読者投稿を主体に編集するユニークな雑誌です
／日々の暮らしから世直しまで知恵と体験を交流し合
います／年間購読料 3,500円 (税・送料込み) 下記へ。

時代と共にあなたの歴史 自分史年表

一家に一冊／書く・読む・調べる記入式
歴史年表／定価1,800円 (税・送料込み)

これから書きつぐ生活ノート メモリー50

1年2ページ、50年間書ける気軽な
メモ帳／定価1,800円 (税・送料込み)

記念の年に贈る同時代シリーズ▶ [昭和6年生まれ／昭和16年生まれ]
既刊▶ [昭和4年・5年／昭和11年・12年・13年・14・15年] ■各巻3500円

株式会社 **ほんご** 出版

代表取締役 池田 忍

東京都中央区八丁堀1-8-2
〒104-0032 ☎03 (3537) 6221
<http://www2.ocn.ne.jp/~hongoo/>

編	集
後	記

★「毎号の『丹波を撮る』を楽しんで見えています」という便りを多くの方から頂きました。この撮影は、木

の根橋横で写真店を営む谷口忠君と市島駅前 の理容店主和久靖之君の支援のお陰で続いています。改めて二人の同期生に御礼申し上げます。(徳田)

★五、六年前からボケ防止もかねて、漢詩(主として唐詩)を北京語で読む勉強をしています。奮闘努力の甲斐もなく、遅々として進まずというのが現状ですが、せっかくなので始めたのだから、残り時間いっぱい続けてみようかと決心しなおしているところなんです。なにせ独学ですので、発音が正しいのかどうかをチェックする術がありません。原語のテープやCDも手元にあるにはあるのですが、音感の悪さは無類ゆえ、なんともならないのです。どなたかご教授願えれば幸いです。★さて、山ざる32号です。やっと送りだすことができました。発送業務を承って

いる者として、千四百通ほどの冊子小包にして、郵便局に差し出したときほど安堵感にひたれることはありません。33号も無事に発行できますよう、会員諸兄弟の一層のご協力をお願いします。(坂上)

★見るべきものはすべて見つ……とでもいうのでしようか、地上四〇〇メートルを超す摩天楼二塔に旅客機が突っ込み、炎上崩落する様を。しかも乗っ取りによる自爆テロであったとは、まさに驚愕するほかありません。新世紀も、これまでの経過からいって決して明るい展望も見えず、生活が豊かになったわりには、人間どうし押し合いへし合いして、殺伐とした社会に汲々しているように見えます。

★「こんな世の中にするためにがんばってきたんじゃないんだけど」郷友会に集う年配者がふと洩らす言葉。その多くは、戦後の早い時期に青雲の志を抱いて上京、丹波人の真骨頂である勤勉と誠実さで粉骨碎身、経済成長の波にも乗って各界で活躍し、事業家として成功した人

もいます。個人や家族としても、努力の甲斐あって生活は目に見えて向上し、豊かになった現在、達成感と共に充実感もないわけではありません。しかし、その結果、経済効率一本ヤリの社会が生み出され、情緒も礼儀も公德心も失われつつあることに憂慮せざるを得ません。秋も甜、少し異常は感じられませんが、自然はけなげに季節を演出します。(池田)

山ざる 第32号

平成十三年十一月一日発行

委員 足立静雄 池田 忍 木呂子恵美子
足立和巳 大野善三 小田富士夫
片岡クミ子 坂上勝朗 常岡幹彦
鶴田ゆき子 徳田八郎衛 本城英明
宮野 近 渡邊隆男

発行者 関東水上郷友会会長 渡邊 隆男

〒101-0061 東京都千代田区神田小川町一ノ二
DMSビル内・関東水上郷友会・事務局

☎〇三(三三)九三二九六一

振替〇〇一〇一三二二二〇

製 作 株式会社二支社

編集協力 株式会社ホンゴ出版

おもわず 新しい

NEXT



人びとが暮らしの中で願っていたことに、それ以上のモノで、最良のカタチで応えていきたい。
そして、人びとの「心」を包み、「夢」を装うことができる企業
ネクスタはそういう存在であり続けたいと考えています。

ネクスタ株式会社

東京支店 111-0052 東京都台東区柳橋1-20-4久月ビル8F TEL 03-3861-2331

ネクスタ ラッパイ株式会社

東京工場 121-0011 東京都足立区中央本町5-22-12 TEL 03-3849-6611
千葉工場 270-0202 千葉県東葛飾郡関宿町台町2192 TEL 0471-96-1721

ネクスタ パッケージ株式会社

栃木工場 323-1104 栃木県下都賀郡藤岡町藤岡4938 TEL 0282-62-3321

中国名画の完全複製

当社は台北の故宮博物院と合作、中国歴代の名筆名画400余点を厳選し、20余年の歳月をかけ、先進技術の粋を駆使し、原蹟と寸分たがわぬ完全複製を完成、美術界の画期的大事業と世界の称賛を集めています。

書齋に居間に、贈答に、悠久の芸術境をお楽しみください。

詳細カタログ進呈。氷上郷友会々員には卸価格で提供。下記社長宛ご一報下さい。



P101 徐悲鴻 奔馬図 (近代)

右には濃墨で力強く描かれた父馬、隣でいかにも優しげに少首を傾げる淡墨淡彩の母馬、左奥から淡褐色の澆刺とした若駒が追いつがる……。躍進の午年にちなんでご紹介するのは、近代中国画壇の世界的巨匠徐悲鴻の傑作で、多くの馬図の中でもひときわ抒情性にあふれ、筆勢の飛躍する名品。

紙本・設色 画面寸法=54.8cm×65.6cm 額装寸法=縦71.0cm×横86.0cm

郷友会々員特別価格：37,000円（頒価 税込 53,550円）

二玄社 社長 渡邊隆男

東京都千代田区神田神保町2-2 / 〒101-8419 電話03-5210-4733 Fax. 03-5210-4723 <http://nigensha.co.jp>